

木戸下遺跡
第2次発掘調査報告書

1997

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

木戸下遺跡

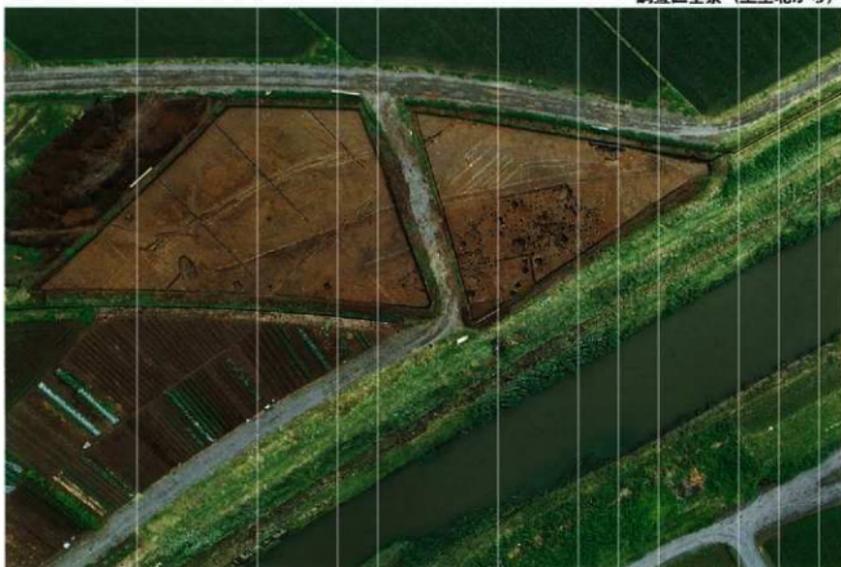
第2次発掘調査報告書

平成9年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区全景（上空北から）



調査区全景（上空から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、木戸下遺跡の調査成果をまとめたものです。

木戸下遺跡は山形県の北西部、遊佐町に位置しています。北から北東にかけては鳥海山の雄姿と緩やかに連なる稜線を見渡すことができ、西は日本海に面しています。県内有数の稲作地帯であり、山海の幸に恵まれた豊かな土地です。

この度、一般国道345号線道路改築工事に伴い、工事に先立って木戸下遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、平安時代及び中世の遺構と、土器や土製品、石製品などが発見されました。土壌の中には墓塚と思われるものが数基含まれています。その結果、当時の埋葬に何らかの形でかかわっていた遺跡であることがわかりました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んで来た貴重な国民的遺産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの貴重な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成9年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清 耕

例 言

- 1 本書は平成8年度一般国道345号線道路改築工事に係る「木戸下遺跡」の第2次発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県教育委員会の委託を受けて、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名	木戸下遺跡(A Y Z K S)	遺跡番号	山形県遺跡番号	2083
所 在 地	山形県飽海郡遊佐町大字富岡字木戸下			
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター			
調 査 期 間	平成8年4月1日～平成9年3月31日			
現 地 調 査	平成8年5月7日～平成8年6月21日			
調 査 担 当 者				

調査第二課長	野尻 侃
主任調査研究員	尾形 典典
調査研究員	佐藤 善春(現場主任)
囑託職員	園井 修

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁建設部道路計画課、遊佐町教育委員会など関係諸機関の協力を得た。
- 5 本書の作成・執筆は、佐藤善春・園井 修が担当した。編集は尾形典典・須賀井新人・豊野潤子・飯塚 稔が担当し、全体について野尻 侃が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。

遺構の写真測量・実測	朝日航洋株式会社
資料の理科学分析(土壌分析)	パリオ・サーヴェイ株式会社
- 7 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

SA…杭列	SB…掘立柱建物跡	SD…溝跡	SG…川跡
SK…土塙	SX…性格不明遺構	EP…ピット	EB…柱跡
RP…登録土器・土製品	RQ…登録石製品		RW…登録木製品
P…土器	S…石		

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆基準は下記の通りである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N-12°50'-Wを測る。
- (3) 遺構実測図は1/40～1/300他の縮図で採録し、各挿図毎スケールを付した。なお、実測図中の●は遺物の出土地点を表す。また1尺は30cmとして計算している。
- (4) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/4で採録し、おのおのスケールを付した。なお、遺物図中のスクリーントーンは漆塗部分または黒色処理を、黒ベタは須恵器を表す。
- (5) 遺物観察表中の計測値欄の()数値は図上復元による復元値を示す。出土地点欄の層位では「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示し、ローマ数字「I～IV」等は遺構を覆う土層（基本層序）を表している。
- (6) 遺物図版については、任意の大きさと採録している。
- (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものである。遺構挿図中に図示している遺物も同様である。
- (8) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	2
II 遺跡の立地と環境	4
III 検出遺構	8
IV 出土遺物	18
V まとめ	30
報告書抄録	31

表

表 1 土壌観察表	16
表 2 遺物観察表(1)	28
表 3 遺物観察表(2)	29

挿 図

第1図	木戸下遺跡位置図	1	第10図	S K96土壌及び S X13性格不明遺構	16
第2図	木戸下遺跡調査概要図	3	第11図	S K12土壌、S X11性格不明遺構 及びS D49溝跡	17
第3図	木戸下遺跡基本層序	5	第12図	S K12・17・18他土壌出土遺物	21
第4図	木戸下遺跡遺構配置図	6	第13図	S K33土壌及び S D43他溝跡出土遺物	22
第5図	S A 2 掘立柱建物跡・ S B 1 杭列跡	11	第14図	S X11・13性格不明遺構他 出土遺物	23
第6図	S K19・20・21・22・24・23土壌 及びS D46・87溝跡	12	第15図	包含層出土遺物(1)	24
第7図	S K31・29・30・15・16・118土壌 及びS D85溝跡	13	第16図	包含層出土遺物(2)	25
第8図	S K27・28・33土壌 及びS D47溝跡	14	第17図	包含層出土遺物(3)	26
第9図	S K18・117土壌	15	第18図	坏分類図	27

図 版

巻頭図版 調査区全景(空中写真)

図版1 木戸下遺跡遠景・北区全景

図版2 調査風景

図版3 S B 2 掘立柱建物跡・S A 1 杭列

図版4 S D87溝跡及びS K31・30・16土壌

図版5 S K19・20・21・24土壌

図版6 S K15・27・28・33土壌他

図版7 遺物出土状況

図版8 出土遺物(1)

図版9 出土遺物(2)

図版10 出土遺物(3)

図版11 出土遺物(4)

図版12 出土遺物(5)



- | | | | |
|-----------------------|----------------------|-----------------|----------------------|
| 1 : 木戸下遺跡(1994・1996) | 2 : 上高田遺跡(1994・1996) | 3 : 箭田遺跡(1992) | 4 : 野瀬遺跡 |
| 5 : 中田浦遺跡(1992) | 6 : 上山崎遺跡 | 7 : 田中遺跡 | 8 : 地藏田遺跡 |
| 9 : 北目長田遺跡(1994・1995) | 10 : 樺待遺跡(1994・1995) | 11 : 堂田遺跡(1994) | 12 : 宮ノ下遺跡(1995) |
| 13 : 道中A・B遺跡 | 14 : 石田遺跡(1992) | 15 : 宅田遺跡(1982) | 16 : 大坪遺跡(1990・1994) |
| 17 : 木原遺跡(1992・1993) | 18 : 古屋敷遺跡 | 19 : 三田遺跡 | 20 : 袋冷遺跡(1991) |
| 21 : 小深田遺跡(1988) | 22 : サナミ坂竪 | 23 : 剣電神社西竪 | 24 : 剣電神社東竪 |
- ※ () 数字は発掘調査年

(国土院発行2万5千分の1地形図「吹浦」を使用)

第1図 木戸下遺跡位置図

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

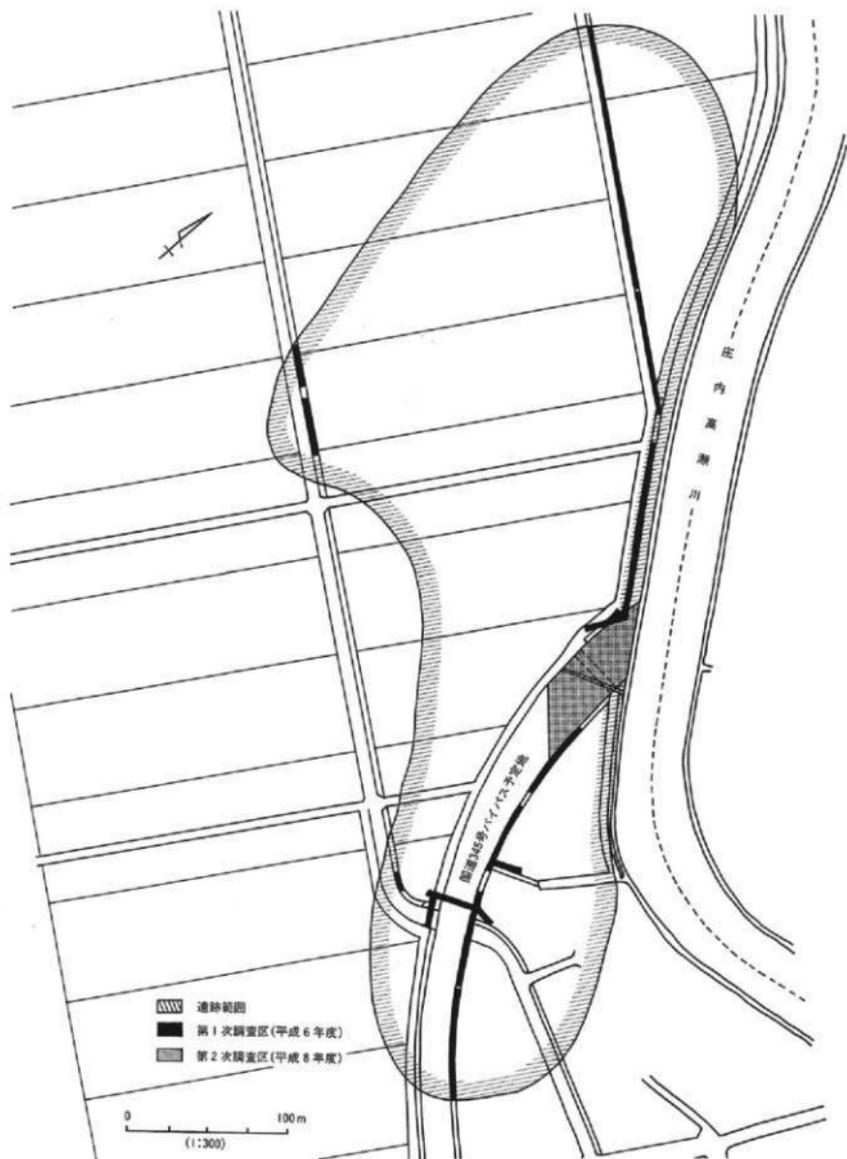
遊佐町北西部に位置する富岡から北目・山崎集落などの高瀬地区一帯には、庄内高瀬川や月光川の流れに沿って数多くの平安時代を主とする遺跡が点在している。これらの遺跡の立地基盤は、庄内高瀬川や月光川が形成した微高地(自然堤防)と考えることができる。こうした微高地は、周囲よりも水割けがよいといった生産および居住に適した条件を満たしていたと考えられる。しかし当時の集落は、現在に至るまでの自然的・人為的作用による地形変化により辛うじて地中にその痕跡を留めているにすぎない。

一方、これらの遺跡は近年県営ほ場整備事業等の大規模な開発の影響を直接かつ広範に受けるようになっている。そのため県教育委員会では昭和54年度から遺跡詳細分布調査を継続的に実施してきた。木戸下遺跡については、平成3年度及び平成4年度の2か年にわたって試掘調査を行っている。これらの調査をもとに、県営ほ場整備事業を原因として農道と国道345号線予定地に並行する排水路部分について、平成6年度に第1次発掘調査(1,500㎡)を実施している(『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第25集)。平成7年度には一般国道345号線道路改築工事を原因として試掘調査を行い、それをもとに平成8年度に第2次発掘調査(1,800㎡)を実施する運びとなったものである。第1次、第2次のいずれも、財団法人山形県埋蔵文化財センターが主体となって調査を実施している。

2 調査の方法と経過

平成8年4月17日に山形県庄内支庁建設部道路計画課と一般国道345号線道路改築工事事業に係わる遺跡発掘調査の打ち合わせ会を開催して最終協議を行った。同年5月7日より現地調査を開始し、同日調査事務所を設置した。5月8日に調査実施区域の確認を行い、その結果調査区をほぼ東西に横断する仮道を挟み、北区・南区の大区画を設定した。また調査区周囲の布掘りを実施し、遺構面までの深さの確認をした。遺構面は調査区東側が西側より一段高位であることが確認された。5月9日～14日、重機による表土除去作業を行った。調査区東側より遺物の出土が多く見られた。5月13日・14日にベンチマーク及び建設予定の国道のセンター杭を基準とした5m×5mのグリッドを設定した。5月13日から表土の除去の終了した部分より遺構検出にむけての面整理作業を開始した。北区では土壇、ピット等の遺構が多数検出された。南区では、河川跡、水田跡等が検出されたが、北区の方がより遺構が密であった。遺物も同様である。5月31日からは遺構精査を開始した。遺構はベルトを残し土層を観察しながら掘り下げ、層位毎遺物の取り上げを行った。出土遺物は赤焼土器が大半を占めた。6月13日には調査成果を公表するための調査説明会を開催し、約100名の参加者があった。6月20日に空中写真撮影を行い、6月21日に予定通りに調査を終了した。

また調査の全期間にわたって写真撮影、遺構・遺物の登録、図面作成等の記録作業を他の作業と並行して行っている。



第2図 木戸下遺跡調査概要図

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

木戸下遺跡は、山形県飽海郡遊佐町大字富岡字木戸下に所在し、遊佐町中心部から北西方向に約2km、庄内高瀬川中流左岸に位置する。北から北東にかけては古来より出羽富士とも呼ばれている鳥海山の秀麗な姿を見ることができる。西方約3kmには日本海からの季節風を遮る庄内砂丘が迫っている。そして南方には肥沃な庄内平野が広がっている。遺跡は東西600m・南北200mの規模で広がっており、標高は約7mを測る。庄内高瀬川が形成した自然堤防(微高地)上に立地しており、北東から南西に緩やかに傾斜している。現在の地目は水田等である。

遺跡周辺は、庄内平野北端にあたる。庄内高瀬川や月光川などの中小の河川が形成した扇状地と潟湖性の海岸低湿地に区分され、低地は軟弱地盤である。木戸下遺跡から南方約3kmの下長橋遺跡では、噴砂跡や特定方向への柱根の傾きなど古地震による砂地盤の流動化の跡を示す遺構が検出されている。また木戸下遺跡から南方約500mに位置する上高田遺跡、南東方約2kmに位置する大坪遺跡からは幅15~20mの河川跡が検出されており、河川の氾濫による地形変化を窺わせる。上記の他にも庄内高瀬川沿いには、平安時代を中心とした数多くの遺跡が点在している(第1図)。これらの遺跡は木戸下遺跡と同様の立地条件であると理解できる。現在では長年の大規模なほ場整備事業等の影響により、だいぶ平坦化されているが、かつては自然堤防や後背湿地が、流路に沿ってより明確な形で存在していたと推察される。当時の人々は比較的高燥な自然堤防上を居住空間に、低湿な後背湿地や小河川のそばは水田にと、自然地形を有効に活用して生活を営んでいたと考えられる。

2 歴史的環境

遊佐町は県内でも有数の遺跡密集地である。木戸下遺跡の周辺にも数多くの遺跡が確認されている。これらの遺跡は道路整備事業や継続的に行われているほ場整備事業等により、そのほとんどで発掘調査が実施されており、調査の結果、それらの遺跡の多くは平安時代を主とする集落跡であることがわかっている。

木戸下遺跡についてもこれまでは平安時代を主とした集落跡であると認識されてきた。しかし今回の発掘調査の結果、平安時代の他に中世の遺構・遺物が確認され、その中に基壇であると推定される土壇が含まれていることがわかった。このことから当時の埋葬に関連した遺跡である可能性がでてきた(第V章参照)。

木戸下遺跡近隣の平安時代の遺跡としては北目長田遺跡、櫛待遺跡、筋田遺跡、野瀬遺跡、中田浦遺跡、上高田遺跡、宮ノ下遺跡、石田遺跡、宅田遺跡、大坪遺跡等があり(第1図)、そのほとんどは9世紀から10世紀に継起している。

このことは、この地域が9世紀に入って大きく再編されたことを物語っている。木戸下遺跡の南方約8kmには出羽国井口の国府に比定される「城輪柵跡」があり、大坪遺跡からは灰釉陶器、大量の墨書土器の他、京への貢進物だった「菖(甘葛煎)」の負担者を記録した木簡が出土し

ている。これらのことを考え合わせると、この地域の再編は律令政府の支配域の拡大あるいは縮小の過程の中で行われていったものであるといえよう。

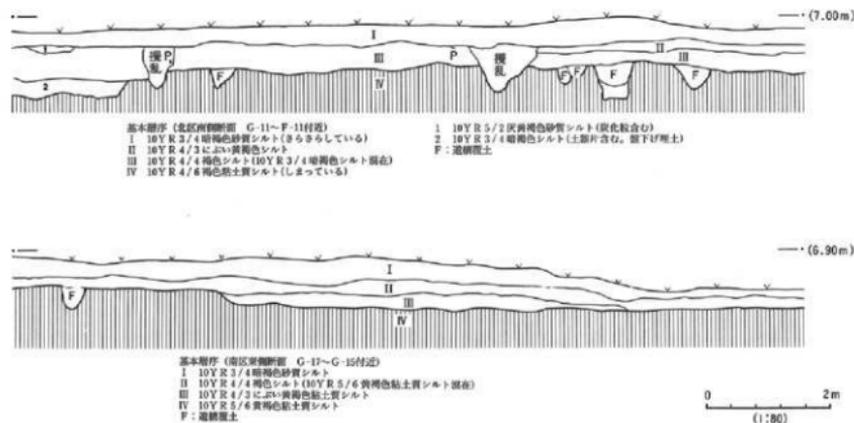
中世を主とする遺跡で、館跡に限って言えば平津館、北目館、大楯遺跡等がある。大楯遺跡では発掘調査の結果、12世紀～14世紀頃と思われる遺物が数多く出土している。また地名等からもこの地域の中心的な役割を果たしていたことが窺える。

以上、木戸下遺跡をとりまく歴史的環境について概略した。今後の調査によりこれらの遺跡がより明らかにされ、当時の飽海郡の姿が解明されていくであろう。

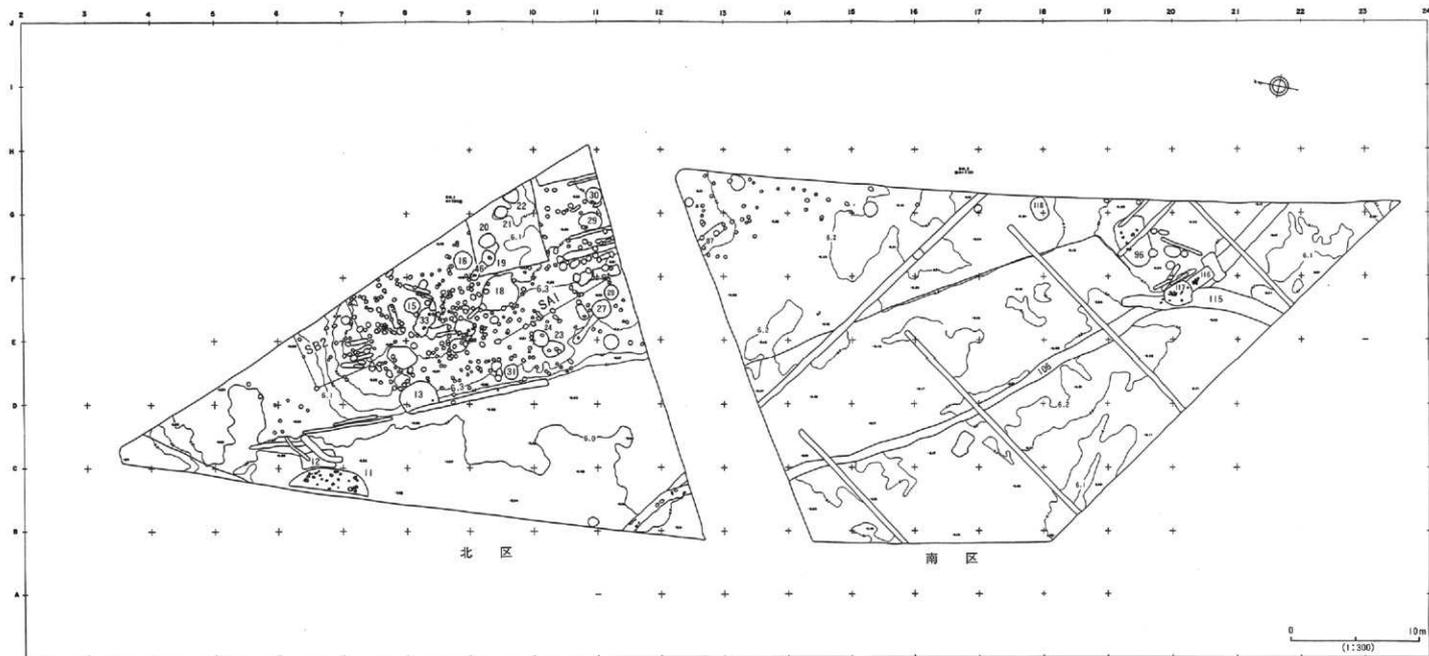
3 遺跡の層序

調査区の土層断面を第3図に示した。上段は北区南側G-11～F-11グリッド付近の、下段は南区東側のG-17～G-15グリッド付近の土層断面である。第I層は耕作土、第II層は水田基盤層、第III層は遺物包含層で、第IV層上面が遺構検出面となる。遺構検出面までの深さは地表から約40cmである。北区の東側では第II層は見られず、第I層の下はすぐに第III層となる。第III層は調査区の東側で約20cmの厚さである。調査区の南側にいたっては第III層そのものが見られず、水田面下で第IV層に達する。第IV層は東から西に緩やかに傾斜している。北区の南東部分、南区の北東部分が他の部分より40cmほど高くなっており、今回の発掘調査で検出された遺構のほとんどはこの部分に集中している(第4図)。また南区では近・現代のものと思われる水田跡や暗渠が検出されている。

以上のことから上記の遺構の密であった部分を除いては、長年の水田経営等の人為的作用により削平されたものと推定し得る。



第3図 木戸下遺跡基本層序



第4図 木戸下遺跡遺構配置図

III 検出遺構

1 遺構の分布

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物1棟(SB2)、杭列1列(SA1)、土壇29基、溝跡36条、河川跡1条、性格不明遺構5基等である。

遺構の配置状況は、第4図に示した通りで、遺構の大部分は北区東側に集中している。調査区の地形は東から西にかけて緩やかな傾斜をもち、遺構が集中している地域は、旧河川の自然堤防にあたるものと思われる。北区・南区の南西域は、現水田面のすぐ下で第IV層となり、遺構や遺物はほとんど認められなかった。平成6年度に実施したほ場整備事業の排水路部分を対象とした第1次発掘調査(第3図参照)でも同じような結果が出ている。

2 掘立柱建物跡

SB1(第5図) 北区D~E-6~7グリッドに位置し、梁行二間・桁行二間以上の東西棟であるが、東半が調査区外となるため全形は明らかではない。柱間は、梁行が8尺等間、桁行で9~10尺と捉えられる。掘り方は径20~50cm、検出面からの深さは10~20cmを各測る。建物の主軸方位はN-64°-Wである。北区東側には多数のピットが検出されたが、建物跡と確認できたのは1棟だけであった。

3 杭列

SA1(第5図) 北区E~F-9~11グリッドに位置する。土壇・ピット群が集中している地域の中にあり、掘立柱建物跡の一辺を構成するものと考えられたが、建物を構成するだけの柱穴のまともは確認できず、杭列とした。8尺等間に建つ5本の柱によって構成されている。掘り方は径20~40cmを各測る。主軸方位はN-18°-Wである。

4 土壇

検出された29基の土壇の多くは、北区東側に位置している。また、主な土壇は、その形態や規模等の特徴から次のように類型化できる(表1土壇観察表参照)。

A類：平面形態がほぼ円形を呈し、長軸100~150cm・深さ40cm以上の規模を有する土壇で、遺物はほとんど含まれていない。D~G-8~11グリッドに集中しており、SK19・20・21等が該当する。これらの土壇のいくつかは、土壇墓の可能性が高いことが、覆土の土壇分析によって明らかになっている。

B類：平面形が楕円形や隅丸方形を呈し、長軸100~200cm・深さ40cm未満の比較的浅い土壇である。南区のSK118が1基含まれるが、他は全て北区東側のD~F-8~10グリッドに位置する。遺物の出土量は少ない。

C類：長軸2m以上の規模を有する土壇を一括した。SK12・18・33・96等が該当するが、その位置や出土遺物の状況から、時期差があると考えられる。

以下、A~C類の代表的な遺構について概述する。

SK21(A類：第6図) F~G-9グリッドに位置する。平面は円形で、長軸100cm・短軸92cm・深さ67cmの規模を有する。覆土は、5層に大別される。F2層は焼土を全体に含む黄褐色シル

III 検出遺構

ト、F4・5層は藁や糊殻を含む有機物の腐植土層から炭化物の堆積層となる。F4層は、断面がU字形を呈し、10~15cmの厚さでF1~3層を包み込んでいる。遺物は、F1・2層から須恵器・赤焼土器の坏の破片が3点出土したのみである。

S K30(A類:第7図) G-10~11グリッド、S K21の南方7mに位置する。平面は円形で、長軸130cm・短軸124cm・深さ75cmの規模を有する。覆土は6層からなり、全体に炭化粒を含むが、F1・5層に特に多く含まれる。F6層は炭化物を含む粘土質シルトで、底面近くは礫が混じる。出土遺物は破片のみで、黒色土器3、須恵器10、赤焼土器44、製塩土器2となっている。いずれもF1~3層出土である。

上記2基の土壌については、土壌基としての可能性を探るために、パリーノ・サーヴェイ株式会社にて覆土のリン・カルシウム分析を委託した。以下、その報告の抜粋を記す。

- 試料 S K21・S K30から各層位毎に採取された。S K21が5点、S K30が6点の計11点である。
- 結果 リン酸は、S K21で平均値が5.93 P₂O₅mg/g、S K30が平均値で7.26 P₂O₅mg/gである。平均値付近の値を示すものが多いが、平均値よりも比較的高いものは下層部に多い傾向がある。カルシウムは、S K21で平均値が11.69Ca Omg/g、S K30で5.62Ca Omg/gである。S K30は値のばらつきが小さく、平均値前後の値を示す試料が多いが、S K21はばらつきが大きく、特にF5層では31.6Ca Omg/gという値を示す。
- 考察(遺体埋葬の可能性) 土壌中に自然に存在するリン含有量、すなわち天然賦存量は3.0 P₂O₅mg/gで、最大でも5.0 P₂O₅mg/gと推定される(Bouwen, 1983; Bolt and Bruggenwert, 1980; 川崎ら, 1980; 天野ら, 1991)。今回調査を行った2基の土坑をみると、いずれの平均値も上記の値を上回っており、天然賦存量よりも高い値といえる。低地の遺跡は、リン酸を保持しにくい土壌であることが多く、リン酸含有量値が低い場合が多いことから(東京都北区教育委員会, 1995)、今回の結果は特異ともいえる。また、2基の土坑の特徴として、例外もあるが、リン酸・カルシウムの値とも下位ほど高い傾向にある。これらのことから、2基の土坑には、ヒトなどの動物遺体が埋められていた可能性が高く、その中心は土坑の底部にあったものと考えられる。

この報告からS K21・S K30は遺体を埋葬し土壌基である可能性が高くなった。今回分析を委託したのは2基だけであったが、A類に属し、S K21・S K30の周辺で検出された、S K19・20・22・24(第6図)、S K28(第8図)、S K31(第7図)等の土壌についても同じことがいえるだろう。

S K27(B類:第8図) E-10~11グリッドに位置する。S K28に隣接し、S D47を切る重複関係を持つ。平面は円形で、長軸146cm・短軸138cm・深さ17cmの規模を有する。遺物は破片のみで、黒色土器6、須恵器2、赤焼土器38となっている。B類の土壌は、概ねこのような赤焼土器片が主体の遺物出土状況を示す。また、S K23(第6図)・S K29(第8図)は、A類の土壌の西方に隣接または重複している点でもS K27と共通する。

S K118(B類:第7図) 南区F~G-17~18グリッドに位置する。平面は隅丸方形で、長軸173

cm・短軸116cm・深さ38cmの規模を有する。覆土は、暗褐色シルト、黒褐色シルトの2層からなる。土器はほとんど出土しなかったが、内外面黒漆塗りの木製品皿(14)が1点出土している。

S K 18(C類:第9図) E-9グリッドに位置する。平面は楕円形で、長軸300cm・短軸256cm・深さ91cmの規模を有する比較的大型の土壇である。遺物は、破片集計で黒色土器15、須恵器44、赤焼土器301、製塩土器3を数える。いずれも周囲から流れ込んだものと捉えられるが、瀬戸の卍皿(7)が1点含まれていることが注目される。

S K 33(C類:第8図) E-8グリッドに位置し、東方をE P 64に切られ、南西方でS D 43を切る。平面は不整楕円形で、長軸230cm・短軸128cm・深さ44cmの規模を有する。黒色土器環(15)、赤焼土器環(16・17・18・19・20)、甕(21・22)、甕(23)、製塩土器(24・25)など、遺物がまとまって出土している。出土総数は、破片集計で290点に上る。内訳は、黒色土器27、須恵器17、赤焼土器218、製塩土器28である。

S K 96(C類:第10図) 南区南東端F-19グリッドに位置し、S D 112とS D 113に切られる。長軸402cm・短軸250cm・深さ61cmを測る大型の土壇である。遺物は少ないが、石臼(11)が1点出土している。

S K 117(C類:第9図) E-20グリッド、S K 96の南西方5mに位置し、S G 106を切るS D 115とS D 116をさらに切る重複関係を持つ。長軸228cm・短軸173cm・深さ24cmの規模を有する。遺物は少ないが、珠洲系陶器甕(12・13)が出土している。

5 溝跡

検出された36条の溝跡のうち、遺物がまとまって出土した溝跡は、土壇やピットによって切られているものが多く、本調査区の中でも最も古い時期の遺構であるといえる。以下、3条の溝跡について概述する。

S D 46(第6図) E~F-9グリッドに位置し、S K 19とS K 20に切られる。長さ350cm・幅60cm・深さ30cmを各測る。赤焼土器環(27・28・29・30)がまとまって出土している。破片集計でも、黒色土器13、須恵器24、赤焼土器177を数える。砥石(37)も1点出土している。

S D 47(第8図) D-10~E-11グリッドに位置し、東端部分をS K 27に切られる。長さ270cm以上・幅50cm・深さ20cmの規模を持つ。赤焼土器環(31・32)が出土している。

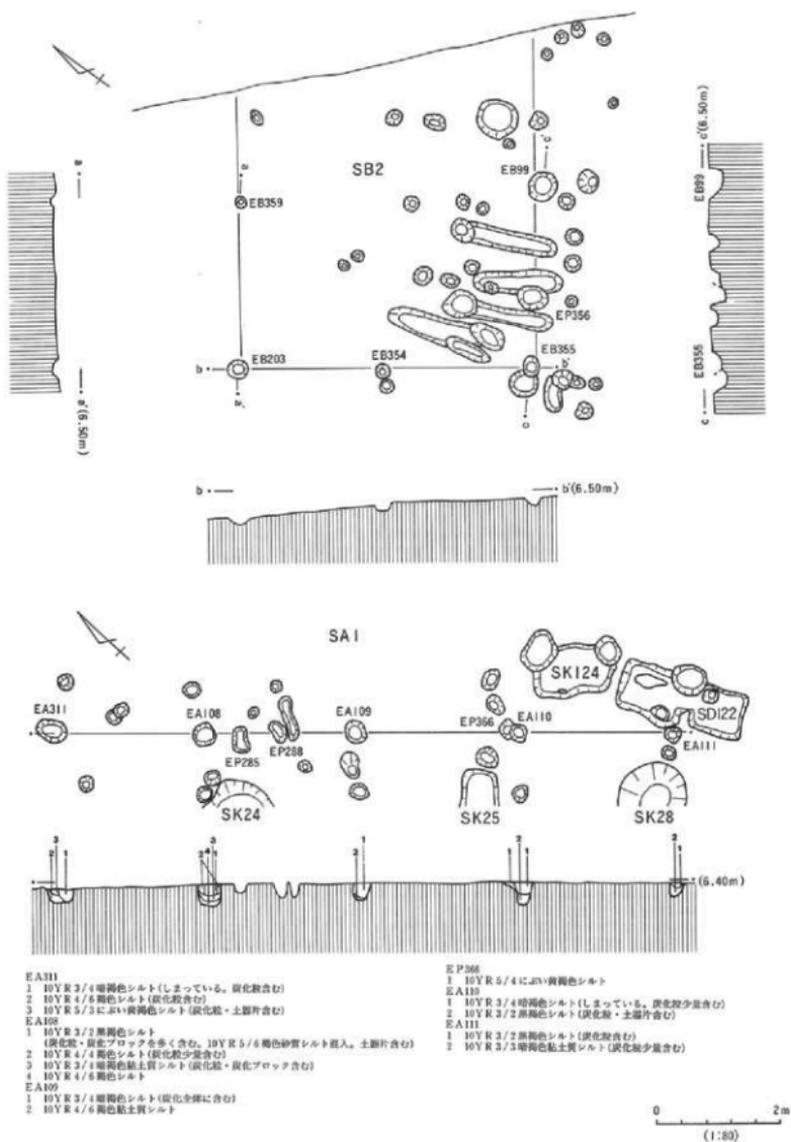
S D 87(第6図) F-12グリッドに位置し、E P 88とE P 89に切られる。長さ280cm以上・幅70cm・深さ15cmの規模を持つ。西側が仮道部分にかかるため、全長は明らかでない。赤焼土器の甕(33)と塀(33)が出土している。

6 性格不明遺構

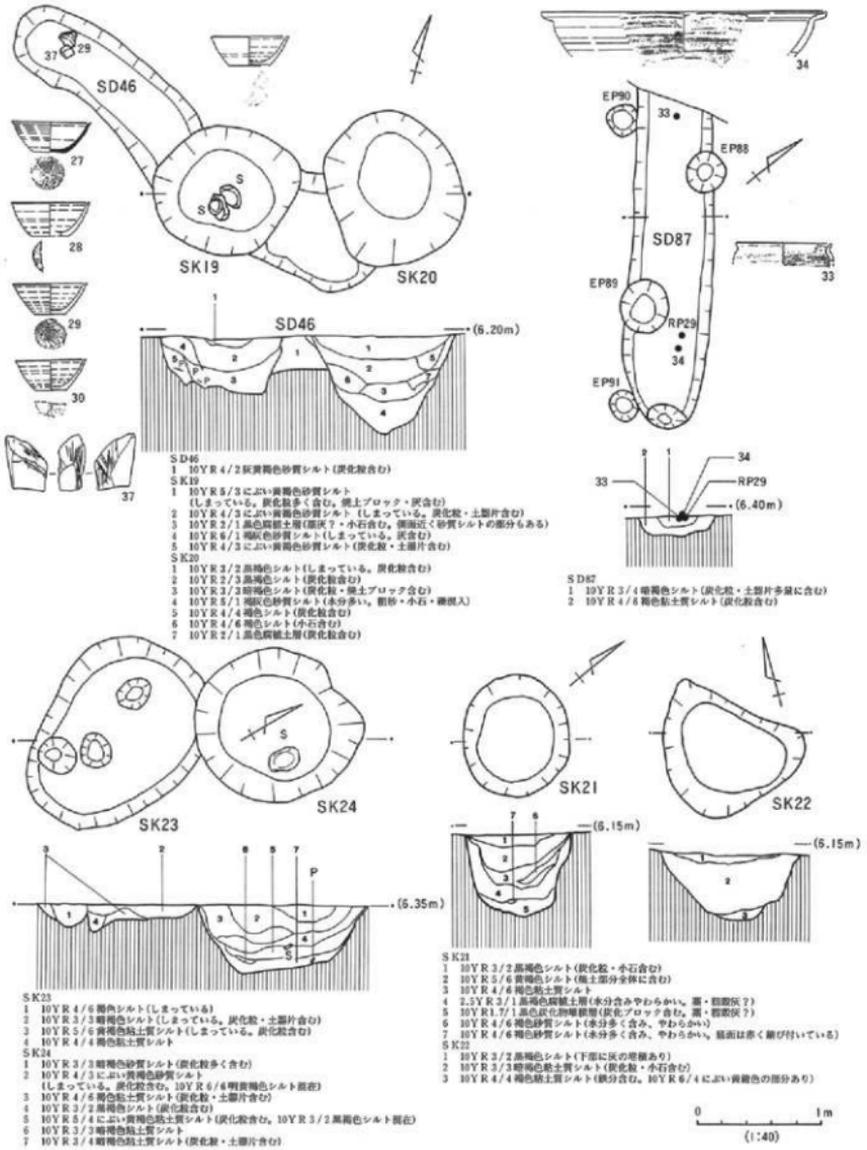
性格不明遺構としたのは5基あるが、ここではS X 11についてのみ概述する。

S X 11(第11図) 北区西端B-6~7グリッドに位置し、調査区の中でも最も低い部分(標高5.9m)にあたる。東西180cm以上・南北630cm・深さ80cm以上の規模を持ち、周囲の高い地域から種々の遺物が流れ込んだ形跡が窺えた。出土遺物は、赤焼土器環(41)、珠洲系陶器甕(42・43)、播鉢(44・45・46・98)、土鍾(48・49)、石臼(47)などである。

III 検出遺構

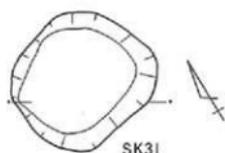


第5図 SA2 杭列跡・SB1 掘立柱建物跡

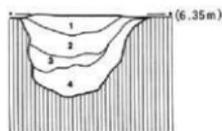


第6図 SK19・20・21・22・24・23土壌及びSD46・87溝跡

III 検出遺構

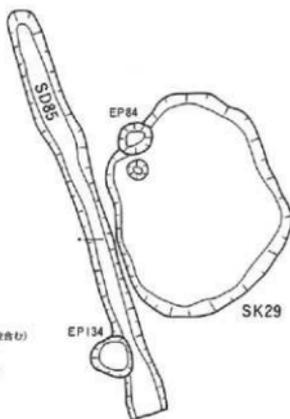


SK31

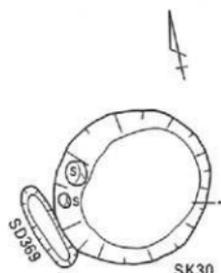


SK31

- 1 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルト(しまっている。炭化粒含む)
- 2 10Y R 4/2 に赤い黄褐色シルト(粘土ブロック含む)
- 3 10Y R 3/4 暗褐色粘土質シルト(炭化粒含む)
- 4 10Y R 4/6 褐色シルト(炭化粒少量含む。細砂含む)



SK29



SK30

SD85

1 10Y R 4/6 褐色シルト

SK29

1 10Y R 4/6 褐色砂質シルト(しまっている。炭化粒少量含む)

SK30

1 10Y R 3/3 暗褐色シルト(しまっている。炭化粒多く含む)

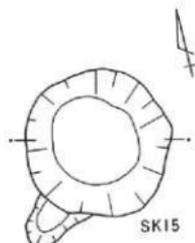
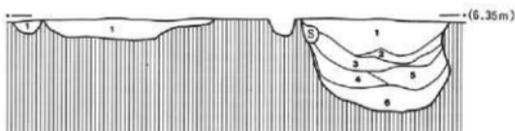
2 10Y R 4/6 暗褐色粘土質シルト

3 10Y R 3/3 暗褐色シルト(炭化粒含む)

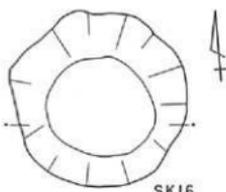
4 10Y R 3/4 暗褐色シルト(炭化粒含む)

5 10Y R 2/3 黒褐色粘土質シルト(炭化粒多く含む)

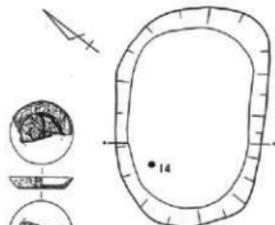
6 10Y R 3/3 暗褐色粘土質シルト(炭化物・小石・雜含む)



SK15

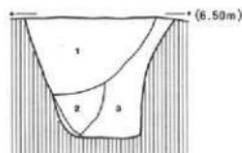


SK16



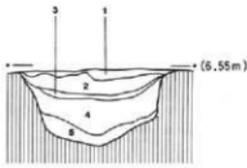
SK18

- 1 10Y R 3/4 暗褐色シルト(しまっている。炭化粒・炭分含む)
- 2 10Y R 3/2 黒褐色シルト(炭化粒・炭分含む)



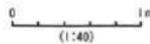
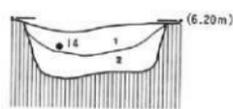
SK15

- 1 10Y R 3/4 暗褐色シルト(しまっている。炭化粒含む)
- 2 10Y R 3/2 褐色シルト(炭化粒含む)
- 3 10Y R 5/6 黄褐色シルト(しまっている。炭化粒含む)

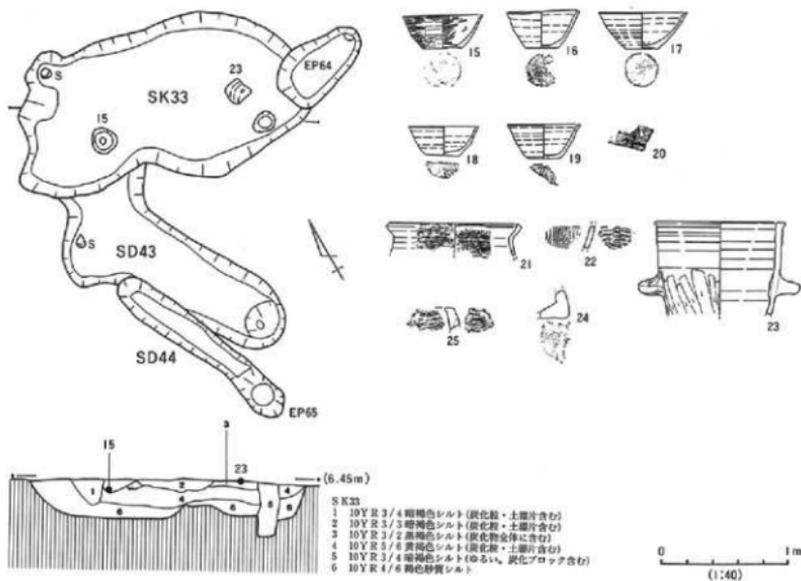
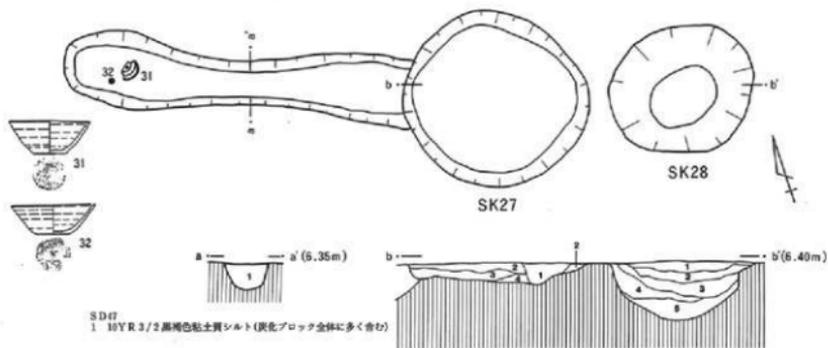


SK16

- 1 10Y R 6/6 暗褐色砂質シルト(しまっている。粘土層?)
- 2 10Y R 4/6 褐色砂質シルト(固くしまっている。炭化粒・粘土粒全体に含む)
- 3 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルト(炭化粒含む)
- 4 10Y R 3/2 黒褐色シルト(しまっている。炭化粒含む)
- 5 10Y R 3/2 黒褐色炭化物層(断面に炭化ブロックあり)

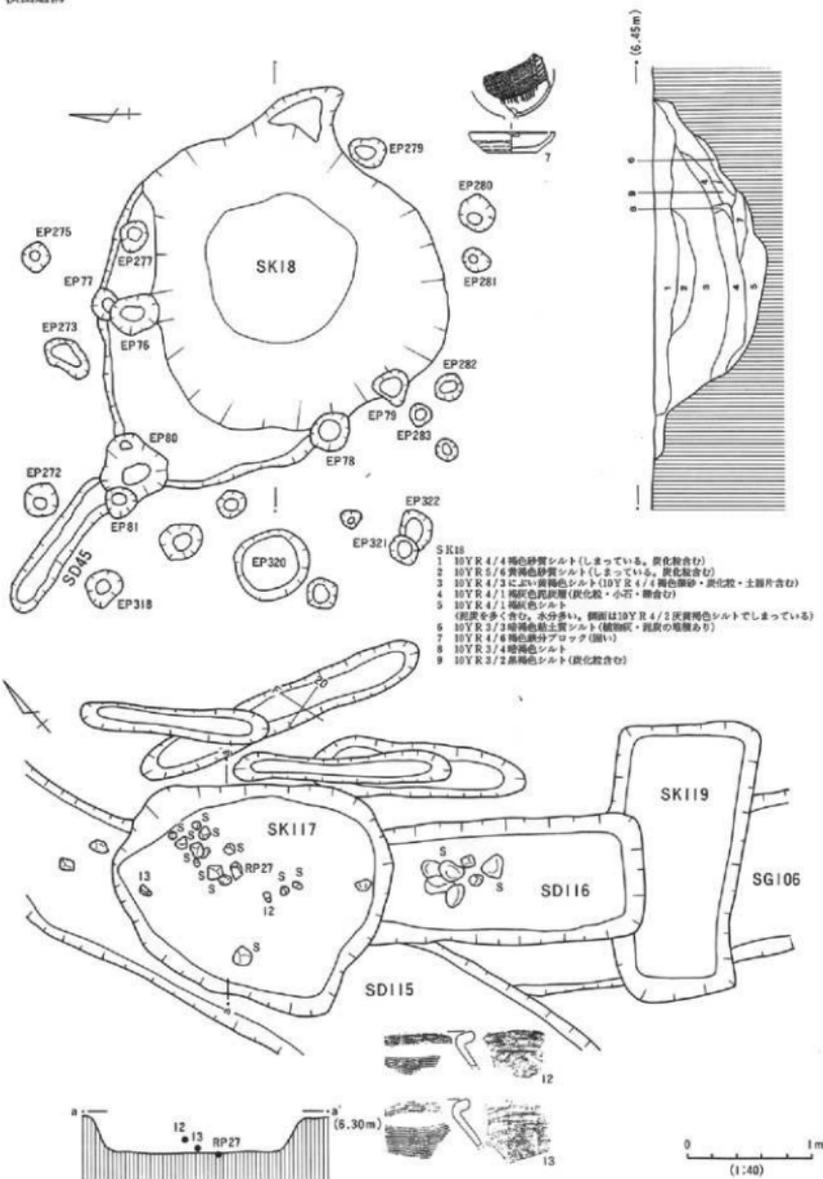


第7図 SK31・29・30・15・16・118土壌及びSD85溝跡

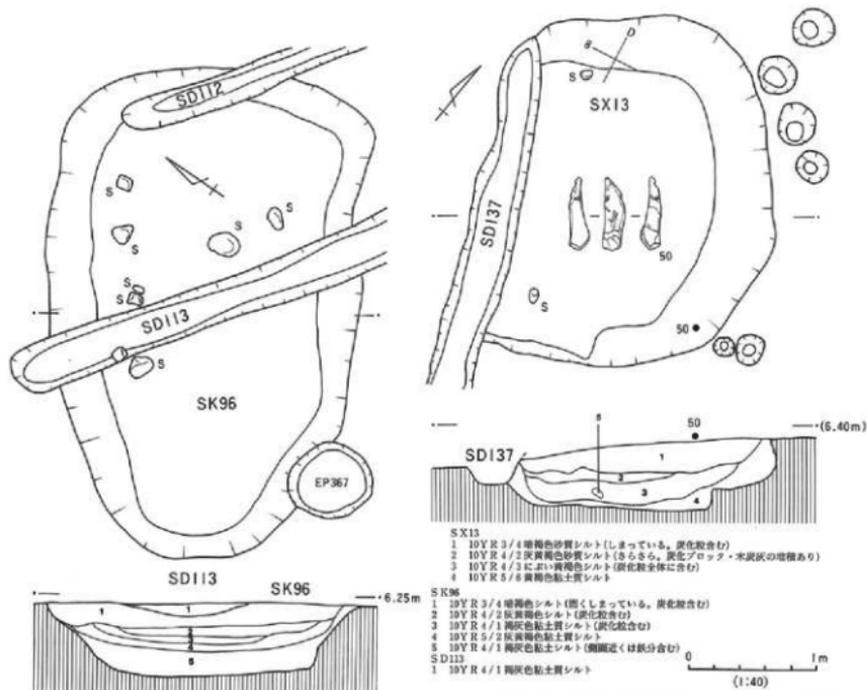


第8図 SK27・28・33土構及びSD47溝跡

III 検出遺構



第9図 SK18・117土壌

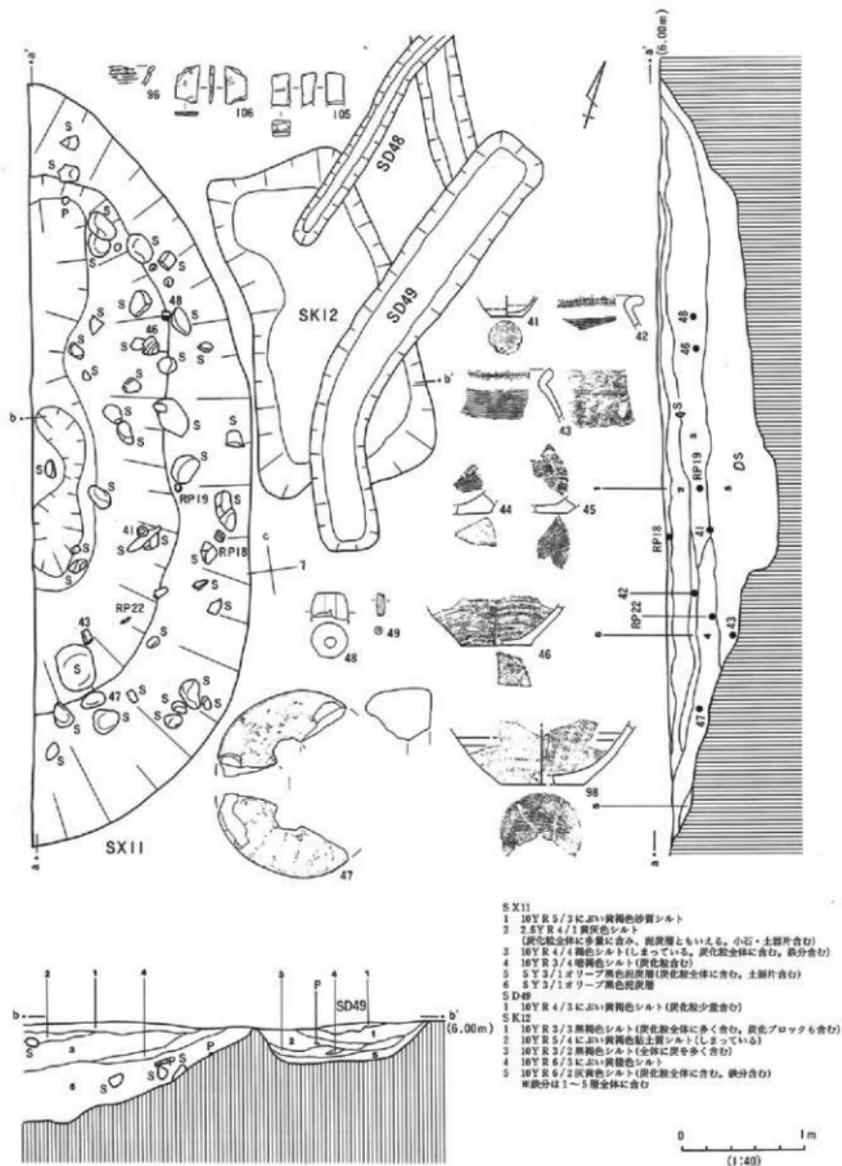


第10図 SK96土壌及びSX13性格不明遺構

表1 土壌観察表

分類	遺構番号	グリッド	平面形態	規模 (cm)			主な出土遺物等	掘削番号
				長軸	短軸	深さ		
A	SK15	F-8	円形	124	121	97		第7図
	SK16	F-8	円形	150	140	64		第7図
	SK19	F-9	円形	124	110	45	赤焼土器片	第6図
	SK20	F-9	楕円形	128	103	78		第6図
	SK21	F-9~G-9	円形	100	92	67	*土壌分析	第6図
	SK22	G-9	円形	116	96	54		第6図
	SK24	D-10~E-10	円形	137	124	57	古銭	第6図
	SK28	E-11	円形	118	108	48		第8図
	SK30	G-10~11	円形	130	124	75	*土壌分析	第7図
	SK31	D-9	円形	112	100	67		第7図
	B	SK17	E-8	隅丸方形	170	118	5	赤焼土器片、製塩土器
SK23		D-10	楕円形	166	122	23		第6図
SK26		D-11~E-11	円形	130	114	13	須恵系埴	第8図
SK27		E-10~11	円形	146	138	17		第7図
SK29		F-10~11	楕円形	182	140	18		第7図
SK118		F-17~G-18	隅丸方形	173	116	38	木製品皿	第7図
C		SK12	C-6	長方形	270	122	30	縄文土器、砥石2
	SK18	E-9	楕円形	300	256	91	銅皿	第9図
	SK33	E-8	不整形円形	230	128	44	黒色土器片、赤焼土器片・壺2・甕、製塩土器	第8図
	SK96	F-19	不整形円形	402	250	61	珠洲系陶器、石臼	第10図
	SK117	E-20	不整形円形	228	173	24	珠洲系陶器2	第9図

III 検出遺構



第11図 SK12土壌、SX11性格不明遺構及びSD49溝跡

IV 出土遺物

1 遺物の分布

本調査で出土した遺物は、遺構内・包含層合わせて整理箱にして20箱相当の分量である。分布状況をみると、遺構が密集する北区東側から集中的に出土し、北区西側及び南区からの出土はごく僅かであった。この点については、「遺構の分布」で述べたとおりである。

種別的には土器が大半を占め、他には土製品・石製品等があった。土器の種別では、遺構内出土総数(破片数)3,118点に限っていえば、黒色土器182、須恵器412、赤焼土器2,448、製塩土器50、中世陶器13、その他13となり、赤焼土器が78.5%を占める。

2 黒色土器

図化できたのは坏が3点で、両黒(15)と内黒(51・52)の2種がある。底部の切り離しは、3点とも回転糸切りである。15はS K33土壇出土の完形品で、内外面の寛磨きとともに外面下半部には手持ち寛削り調整が施されている。52は、15に比して底径はほぼ等しいが、口縁の外傾度が増し、法量も大きくなる。

3 須恵器

破片資料が多く、図化できたのは9点のみである。

壺(53・54) 包含層出土の口縁破片資料のみで、形状等を識別することはできなかった。

坏(27・55・56・57) 4点は、形態と法量及び切り離し技法がそれぞれ異なっており、A～D類に分類した(第18図坏分類図)。A(57)は、底部切り離しが回転寛切りで、口径と底径の差が少なく、底部からの立ち上がりが急である。また、坏身の器高が低く、高径指数(器高/口径×100)は28.8となる。B(56)も、底部切り離しが回転寛切りであるが、底部が丸底風で口縁が直線的に外傾する。C(55)とD(27)は、底部切り離しが回転糸切りである。Cは、底部が小径で口縁が直線的に外傾し、外傾度も大きい。Dは、底部からの立ち上がりがやや内弯気味で、口唇部で外反する。

甕(10) 体部のみだが、外面に平行叩き、内面に格子目アテ痕が観察できる。

壺(59) 内外面輪軸調整で、外面に灰被りがみられる。

横瓶(58) 外面に平行叩き、内面に青海波アテ痕が認められる。断面の形状と灰被りの状況から横瓶とした。

4 赤焼土器

赤焼土器は、今次の調査で最も出土量が多い遺物である。遺構内出土の破片総数2,448点を器種別に分類すると、坏1,424・甕1,019・埴4・甗1となる。

坏 形態が確認できた19点についてみると、底部の切り離し技法はすべて回転糸切りで、口縁が内弯ないし直線的外傾を示す。また、ほとんどの坏が底径が口径の4割以上を占めるという共通点もあり、これまで飽海郡域で最も普遍的に認められてきた一群として一括できる。ここでは、高径指数(器高/口径×100)を用いて、もう少し細かな分類を試みた。その結果、指数が34～36・39～42・45～46・49～50の4類に分類することができた。順にA～D類とし、第18図の分

類図に従って概述する。ちなみに、先の須恵器坏4点をこれに当てはめると、27・55・56はA類に属し、57の28.8はさらに低い数値であることがわかる。

A類(8・32・39・67) 口径122~136mm、底径50~66mm、器高44~48mmを測り、底部からの立ち上がりが緩やかである。口縁が直線的な8・32と内湾する39・67に識別できる。39は口唇での外反と内外面の轆轤痕が顕著である。また、67には二次焼成を示す変色がみられた。

B類(17・18・26・28・29・30・31・66) 口径114~140mm、底径50~58mm、器高48~58mmを測る。A類に比して、底径はほぼ同じだが、器高が増し、外傾度もやや小さくなる。18は歪みが顕著である。また、31は口唇内外面に油煙が付着しており、灯明皿への転用が考えられる。B類の坏は、S K33土壌から2点、S D46溝跡から3点出土しており、これらの遺構の時期を確定できる資料である。

C類(19・40・73) 口径120mm~128mm、底径50~60mm、器高55~59mmを測る。B類に比して、さらに器高が増し、底部からの立ち上がりも急になる。口径、底径、器高の比率がおよそ2:1:1となる。

D類(16・70・71・72) 口径118~156mm、底径54~80mm、器高60~79mmを測る。C類よりさらに器高が増し、立ち上がりも急で深みのある坏である。法量的に小型の16・72と大型の70・71に識別できる。16は歪みが顕著である。

その他、分類に入らなかった坏では、63が注目される。胎土が緻密で焼成が堅牢であるうえに、内面には筥磨き調整が施してある。さらに底部の切り離しは静止糸切りで、高台を意識した調整を行っている。ここでは赤焼土器としたが、その範疇ではないかもしれない。また、底部に墨書された土器片が2点(20・74)出土しているが、いずれも判読は不能である。

壺 破片資料が多く、全形が明らかな資料は得られなかった。ただ、口径を計測できたものについては大型と小型に大別することができる。大型のものとしては、21・75・76があり、口径206~250mmを測る。いずれも煮沸の痕跡を示す煤が器面に付着していた。小型のものには、33・36・77・78・79があり、口径は120~156mmを測る。体部から口縁にかけて緩やかに立ち上がり、口縁部でくの字状に外反する。36・79は、さらに口唇で垂直につまみ立つ。5点とも口唇内面に煤の付着が認められ、蓋を使用して煮沸が行われたことを示している。また、33の内外面及び77の内面には刷毛目調整が認められた。その他、6・22には外面平行叩きと内面平行アテ痕が明瞭に確認できる。

鍋(34・82・83・84) 4点出土している。82・82の外面には、筥削り調整の痕跡を認めることができた。口径は370~470mmを測る。

甗(23) 1点のみの出土である。口径210mm、器厚10mmを測り、体部2カ所に長さ30mm・幅45mm・厚さ25mm程の取っ手が付く。外面体部に筥削り、内面に筥磨で調整を施している。取っ手は手摺によって整形したものを張り付けており、指頭痕が明瞭に残っている。内面からも粘土を付け足して補強している。

5 緑釉陶器

皿が2点(85・86)、いずれも包含層から出土している。淡緑釉の刷毛塗りで、愛知県鳴海産に

比定される。

6 製塩土器

6点図化できた。24・87・88は、バケツ形を呈する製塩土器の底部と考えられ、内外面に指痕での調整痕が認められる。24は砂底で、87・88には草木状の圧痕が残る。25・89・90は、輪痕み痕が明瞭なコンロ形土器(支脚)と捉えられるが、ここでは製塩土器に一括した。

7 珠洲系陶器

甕が4点、壺が1点、播鉢が14点出土している。以下、器種毎に概説する。

甕 4点(12・13・42・43)とも口縁部のみの出土で、いずれも短頸である。外面に3cm当たり9目相当の叩きが認められ、叩打密度の粗大が指摘される。また12・13・43は、くの字口縁、43は円頭の水平口縁と識別できる。

壺 体部の破片が1点(99)のみであるが、外面に菱杉状の叩きが明瞭に観察できる。

播鉢 口縁部4点(35・91・92・93・94)、体部3点(4・95・96)、底部6点(38・44・45・46・97・98)が出土している。91の口縁は、内端に2cm程の面をとり外開きとした形態を示す。35・92・93は方頭の水平口縁で、92・93には柳目波状文の装飾が施されている。94は、三角頭の内傾口縁である。単位を確認できた卸目の原体は2.5cm幅で9目のもの(4・91・92・98)と3.5cm幅で12目のもの(38・94・97)の2種類がある。卸目はすべて直線文で、38・97では8条、98では20条と窺える。

8 瀬戸

卸皿が2点出土している。7は、S K18土壌出土で、口径140mm・底径80mm・器高33mmを測る。底部内面全体に格子目状の卸目が施されている。口縁内側端部が小突起状に形成され、底部切り離しは、回転糸切り未調整である。注口部はほとんど欠落しているが、口縁部の一カ所を指頭により引き出したものと推察される。底部外面から体部下半を除いて灰釉が施されている。もう1点(103)は底部の破片である。

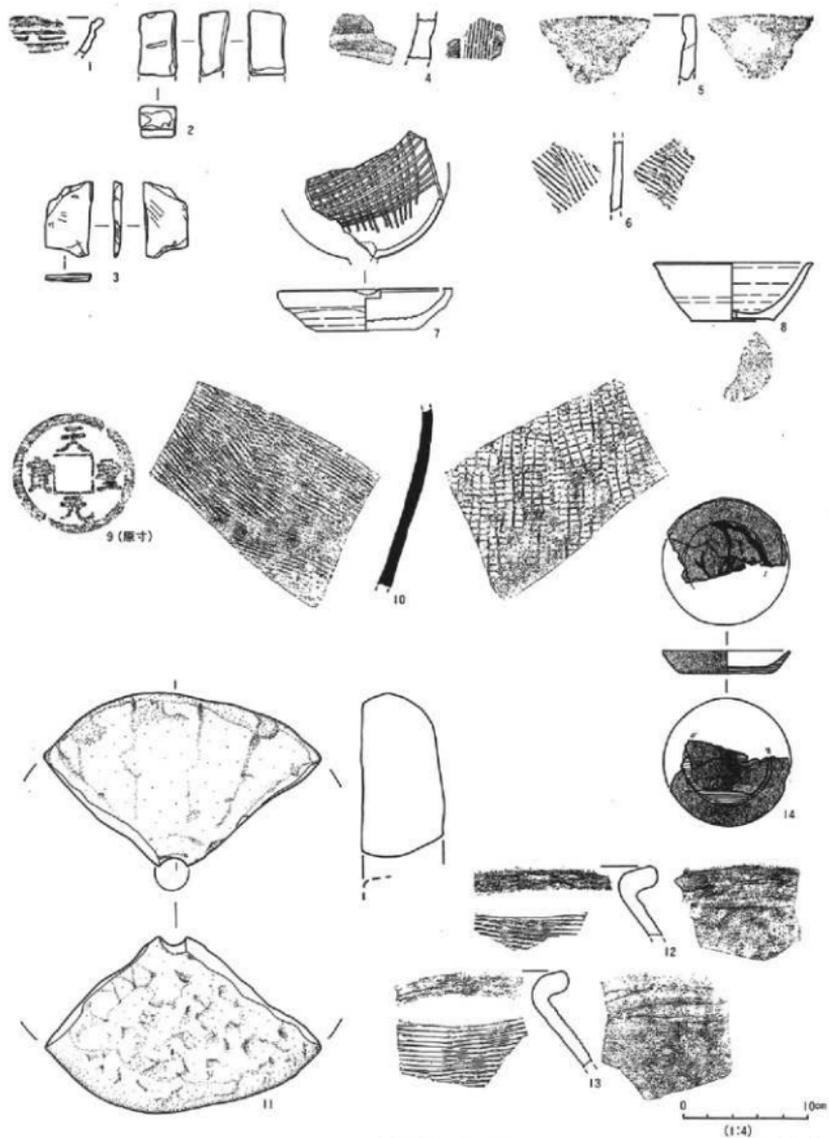
9 青磁・白磁

青磁の輪花皿(100)、碗(111)、白磁の皿(102)がそれぞれ1点ずつ包含層から出土している。100は幅広の蓮弁を持ち、釉調は緑青色で龍泉窯系である。

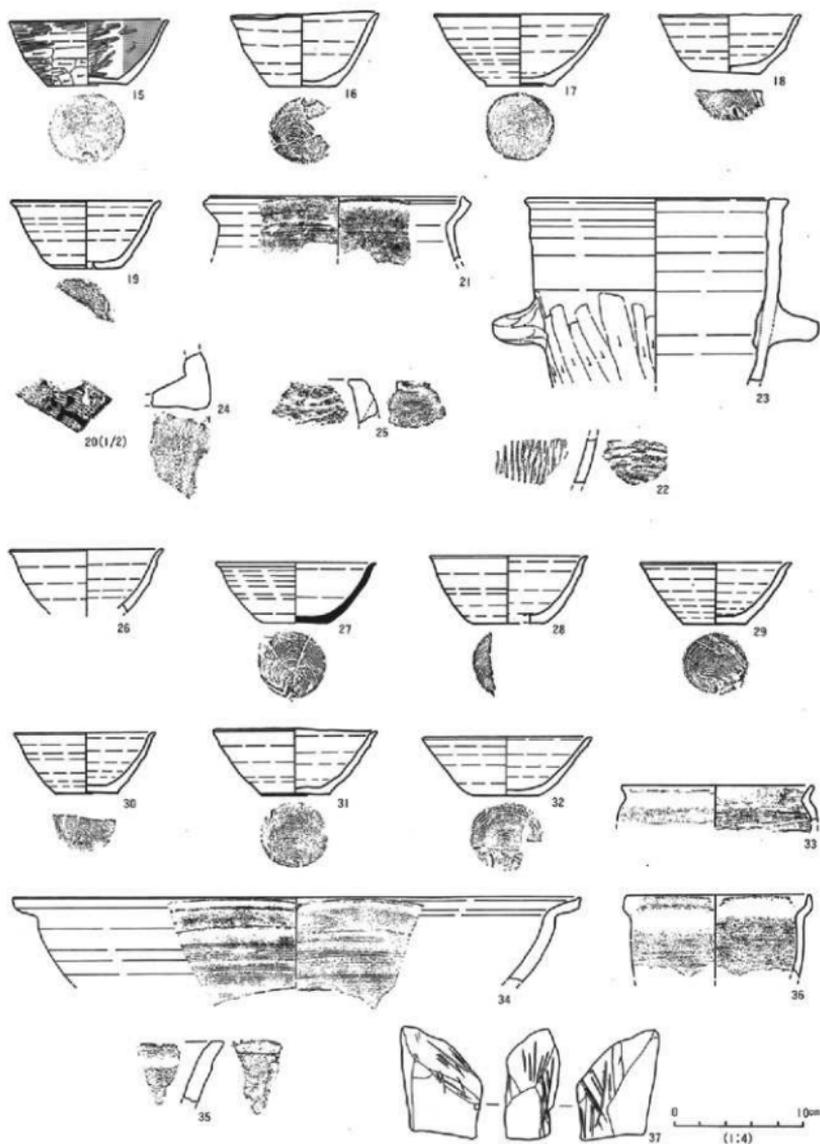
10 土製品・木製品・石製品・金属製品・古銭

土製品では、土甕が3点出土している。径59mmの大型のもの(48)と径12~15mmの小型のもの(49・104)がある。木製品では、皿が1点(14) S K118土壌から出土している。内外面黒漆塗りが施され、底部内外面に朱漆による文様がある。内面には扇を描いたものと思われる。石製品では、石臼が2点(11・47)、砥石が6点(2・3・37・50・108・109)、紡錘車が1点(105)出土している。11は下白で、外径290mm・厚さ65mmを測り、中心に芯棒穴がある。47は上白で、外径280mm・厚さ83mmを測り、中心よりやや外側に穀物の供給口がある。下白の上面と上白の下面には放射線状の主溝が認められた。金属製品では、煙管の雁首(106)と吸口(107)が1点ずつ出土している。古銭は3点で、S K24から北宋銭「天聖元寶」(9)が出土している。他に「寛永通宝」が2点(110・111)包含層から出土している。

IV 出土遺物

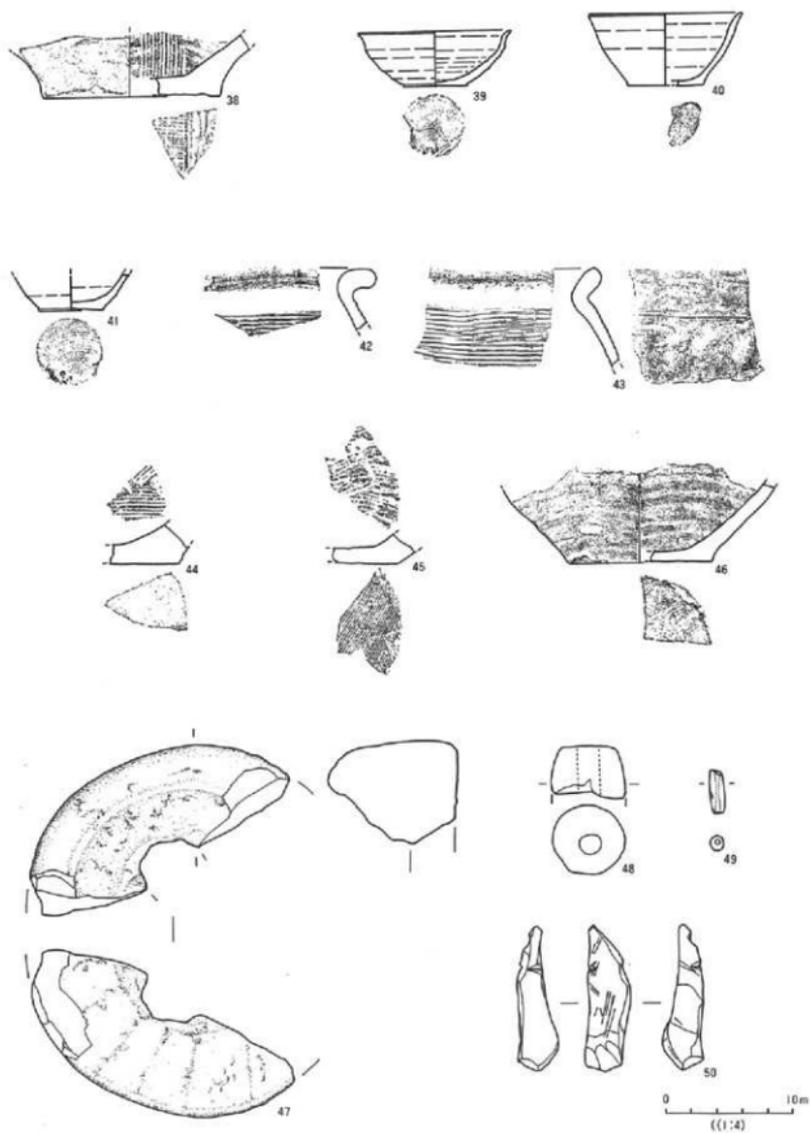


第12圖 SK12・17・18・24・26・96・117・118土坑出土遺物

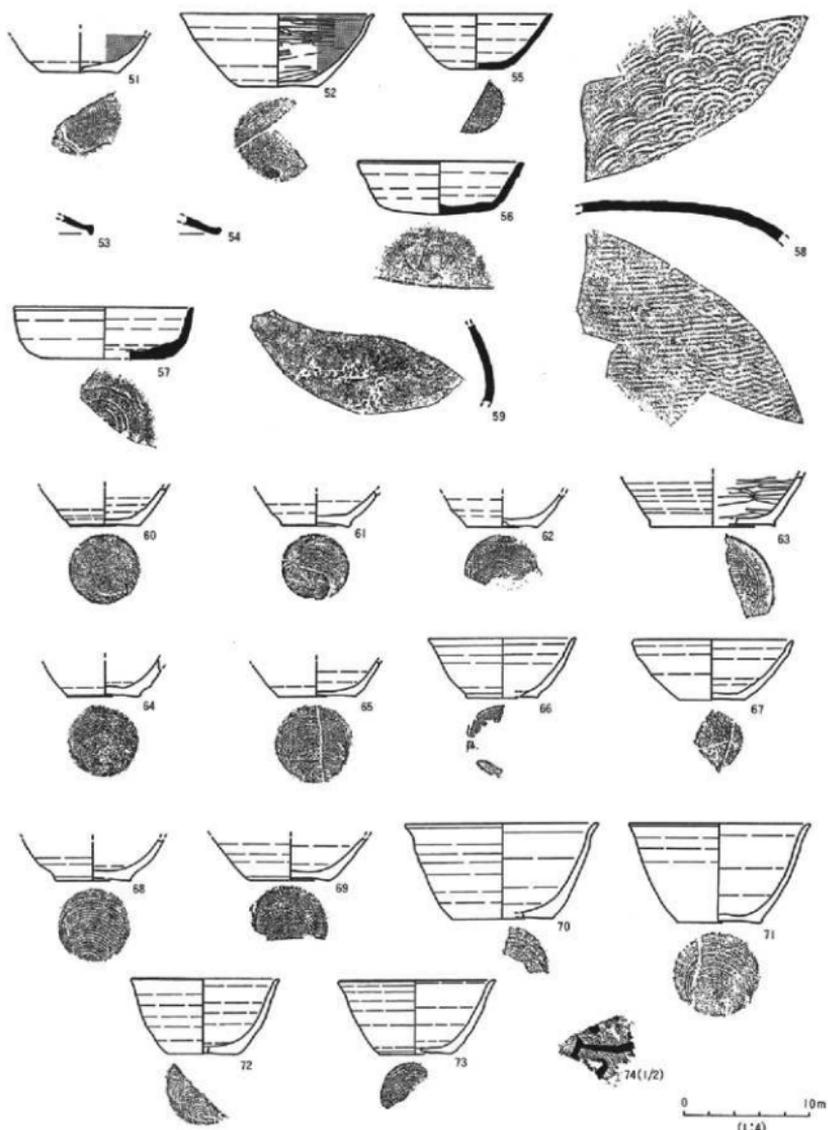


第13圖 SK33土壘及U'SD43・46・47・87・116・137溝跡出土遺物

IV 出土遺物

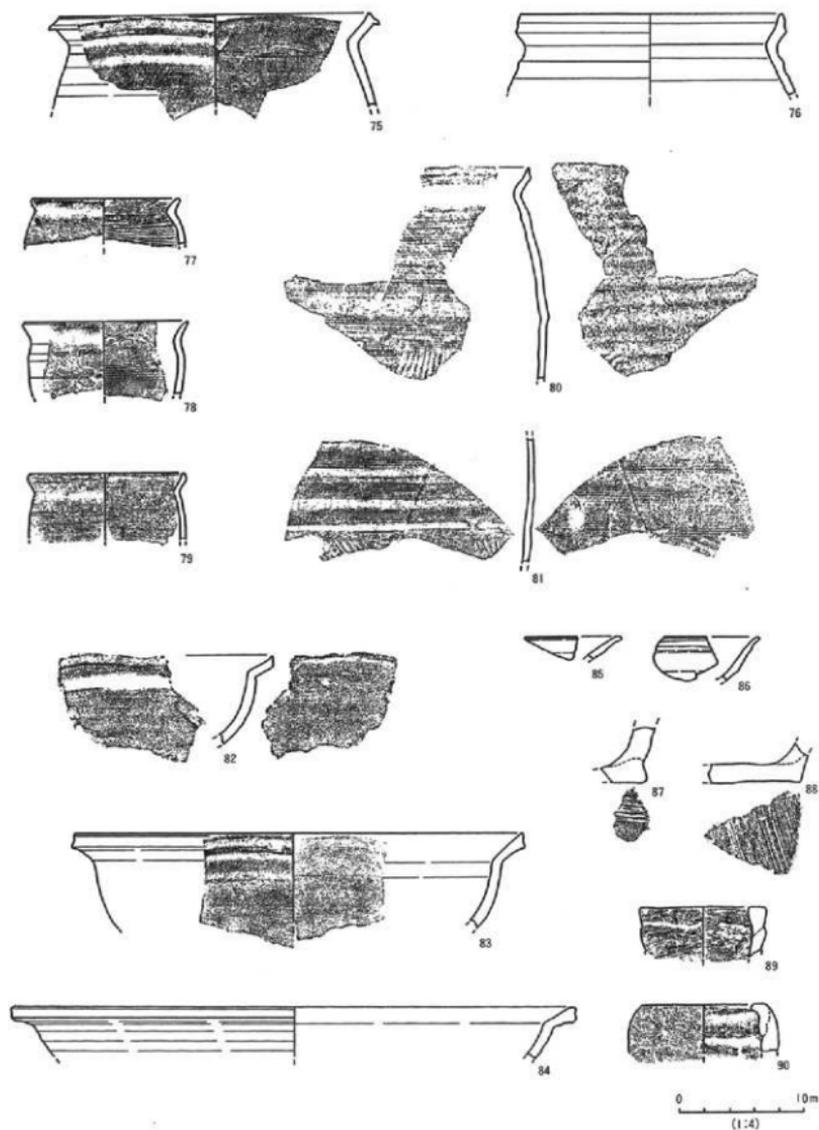


第14図 SX11・13性格不明遺構及びEP97・295ビット出土遺物

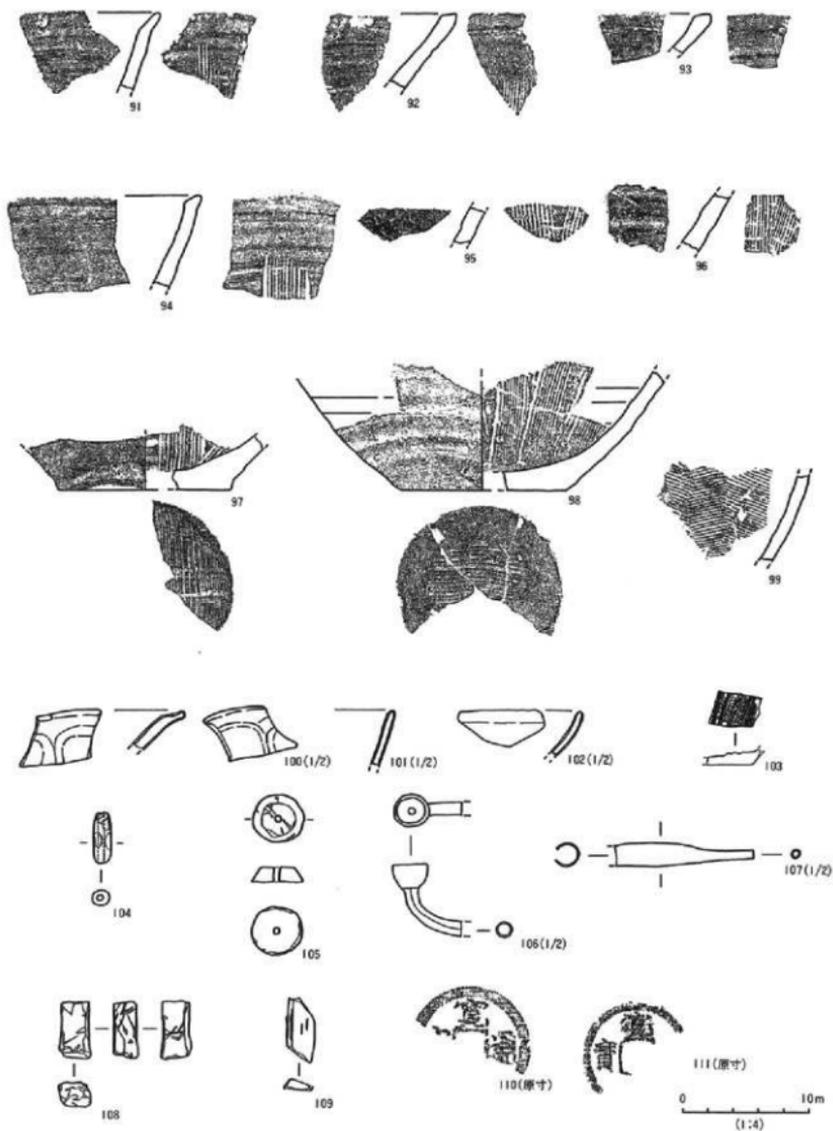


第15圖 包含層出土遺物(1)

IV 出土遺物

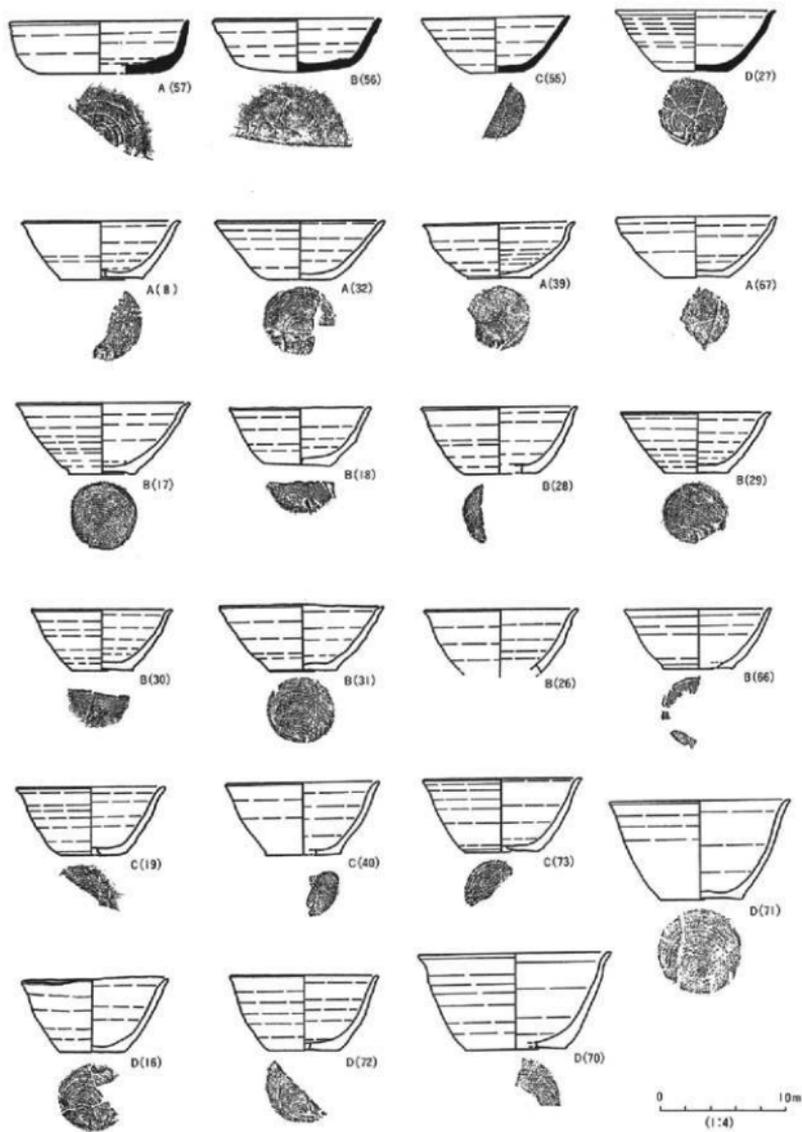


第16図 包含層出土遺物(2)



第17圖 包舍層出土遺物(3)

IV 出土遺物



第18圖 環分類圖

表2 遺物観察表(1)

神別	遺物番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切離	調整技法等		出土地点	登録番号	備考
				口径	底径	器高	器厚		内面	外面			
12	1	縄文土器	浅鉢				5			工字文	S K12 F1	大洞A'	
	2	石製品	砥石	長54	幅30	厚23		重さ51.5g			S K12 F1		
	3	石製品	砥石	長59	幅34	厚6		重さ16.1g			S K12 F1		
	4	珠洲系陶器	磨鉢				15		跡目	口クロ	S K16 F2		
	5	製塩土器	甕				10				S K17 F1	輪積	
	6	赤焼土器	甕				7		アテ	タタキ	S K17 F1		
	7	瀬戸	脚皿 (140)	(80)	33	6		回転糸切	跡目	口クロ	S K18 F1	灰軸	
	8	赤焼土器	坏	(128)	(66)	47	6	回転糸切	口クロ	口クロ	S K19 F1		
	9	古鏡									S K24 F2	「天聖元寶」	
	10	須恵器	甕				8		アテ	タタキ	S K26 F1	R P11	
	11	石製品	石臼	径290	厚65			重さ2337.4g			S K96 F3	下白	
	12	珠洲系陶器	甕				11		口クロ・アテ	口クロ・タタキ	S K117 F1	R P26	
	13	珠洲系陶器	甕				9.5		口クロ・アテ	口クロ・タタキ	S K117 F1	R P28	
13	14	木製品	皿 (104)	72	18	4					S K118 F2	R W25 漆塗	
	15	黒色土器	坏	132	62	53.5	6.5	回転糸切	ミガキ	タタキ・タタキ	S K33 F1	R P13 内黒	
	16	赤焼土器	坏	118	54	60	5	回転糸切	口クロ	口クロ	S K33 F1	面み	
	17	赤焼土器	坏	140	54	58	4	回転糸切	口クロ	口クロ	S K33 F1	面み	
	18	赤焼土器	坏	(114)	54	48	4	回転糸切	口クロ	口クロ	S K33 F1	面み	
	19	赤焼土器	坏	(120)	(50)	55	5	回転糸切	口クロ	口クロ	S K33 F1		
	20	赤焼土器	坏				7	回転糸切			S K33 F1	墨書不明	
	21	赤焼土器	甕 (206)				6		口クロ	口クロ	S K33 F1		
	22	赤焼土器	甕				8		アテ	タタキ	S K33 F1		
	23	赤焼土器	甕 (210)				10		口クロ・アテ	口クロ・タタキ	S K33 F1	R P6 取手付	
	24	製塩土器	石臼				18				S K33 F1	輪積・砂底	
	25	製塩土器	コンロ形				15		ナデ		S K33 F1	輪積・被熱	
	26	赤焼土器	坏	124	50	5.5			口クロ	口クロ	S D43 F1		
	27	須恵器	坏 (130)	52	49	4		回転糸切	口クロ	口クロ	S D46 F1		
	28	赤焼土器	坏 (126)	(58)	54	6		回転糸切	口クロ	口クロ	S D46 F1		
	29	赤焼土器	坏	121	50	50	5	回転糸切	口クロ	口クロ	S D46 F1	R P32	
	30	赤焼土器	坏 (114)	(50)	49	5		回転糸切	口クロ	口クロ	S D46 F1		
	31	赤焼土器	坏 (132)	54	52	5		回転糸切	口クロ	口クロ	S D47 F1	R P15 漆塗	
	32	赤焼土器	坏 (136)	56	47	5		回転糸切	口クロ	口クロ	S D47 F1	R P14	
	33	赤焼土器	甕 (156)				6		口クロ・ハナメ	口クロ・ハナメ	S D87 F1	R P31	
34	赤焼土器	甕 (460)				10		口クロ	口クロ	S D87 F1	R P30		
35	珠洲系陶器	磨鉢				13		口クロ	口クロ	S D116 F1			
36	赤焼土器	甕 (148)				6		口クロ	口クロ	S D137 F1			
37	石製品	砥石	長83	幅62	厚41		重さ212.6g			S D46 F1	R Q33		
14	38	珠洲系陶器	磨鉢 (148)			14		静止糸切	跡目	口クロ	E P97 F1	R P12 草木状圧痕	
	39	赤焼土器	坏 (122)	50	44	5		回転糸切	口クロ	口クロ	E P295 F1		
	40	赤焼土器	坏 (124)	(60)	58	5		回転糸切	口クロ	口クロ	E P295 F1		
	41	赤焼土器	坏		52	5		回転糸切	口クロ	口クロ	S X11 F2	R P20	
	42	珠洲系陶器	甕				9		口クロ・アテ	口クロ・タタキ	S X11 F2	R P23	
	43	珠洲系陶器	甕				9		口クロ・アテ	口クロ・タタキ	S X11 F2	R P24	
	44	珠洲系陶器	磨鉢 (152)			19		静止糸切	跡目	口クロ	S X11 F1	草木状圧痕	
	45	珠洲系陶器	磨鉢 (154)			10.5		静止糸切	跡目	口クロ	S X11 F3		
	46	珠洲系陶器	磨鉢 (116)			11			口クロ	口クロ	S X11 F2	R P16 草木状圧痕	
	47	石製品	石臼	径280	厚83			重さ2470.8g			S X11 F2	R Q21 上白	
	48	土製品	土甕	長43	径59	幅18		重さ107.6g			S X11 F2	R P17	
	49	土製品	土甕	長36	径12	幅5		重さ5.2g			S X11 F2	指頭痕	
	50	石製品	砥石	長119	幅25	厚34		重さ138.4g			S X13 F1	R Q7	
15	51	黒色土器	坏 (64)			5		回転糸切	口クロ・ミガキ	口クロ	E-7組	R P3 内黒	
	52	黒色土器	坏 (156)	64	59	4		回転糸切	口クロ・ミガキ	口クロ	E-7組	R P4 内黒	
	53	須恵器	蓋				3.5					北区II～III	
	54	須恵器	蓋				5					北区II～III	
	55	須恵器	坏 (120)	(44)	45	4		回転糸切	口クロ	口クロ	D-7組		
	56	須恵器	坏 (134)	(90)	43	5		回転糸切	口クロ	口クロ	南区II～III		
	57	須恵器	坏 (146)	(100)	42	5		回転糸切	口クロ	口クロ	D-9組		

表3 遺物観察表(2)

種類	遺物番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切磨	調整技法等		出土地点	登録番号	備考
				口径	底径	器高	器厚		内面	外面			
15	58	須恵器	横帆				7		ロクロ・アテ	ロクロ・ナギ	北区II～III		外面灰被り
	59	須恵器	壺				5		ロクロ	ロクロ	北区II～III		外面灰被り
	60	赤焼土器	坏		56		5		ロクロ	ロクロ	D-7III	R P 1	
	61	赤焼土器	坏		54		5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	E-8III	R P 5	
	62	赤焼土器	坏		58		4		ロクロ	ロクロ	E-10III		
	63	赤焼土器	坏		(100)		5	静止糸切	ロクロ・ナギ	ロクロ	E-7III		
	64	赤焼土器	坏		59		7	回転糸切	ロクロ	ロクロ	F-9III	R P 8	被熱
	65	赤焼土器	坏		62		4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	北区II～III		
	66	赤焼土器	坏	(118)	56	48	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	北区II～III		
	67	赤焼土器	坏	(135)	(50)	48	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	北区II～III		被熱
	68	赤焼土器	坏		60		6	回転糸切	ロクロ	ロクロ	北区II～III		
	69	赤焼土器	坏		64		5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	北区II～III		
	70	赤焼土器	坏	(156)	(80)	77	6	回転糸切	ロクロ	ロクロ	北区II～III		
	71	赤焼土器	坏	(146)	68	79	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	北区II～III		
	72	赤焼土器	坏	(120)	(58)	61	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	北区II～III		
73	赤焼土器	坏	(128)	(60)	59	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	北区II～III			
74	赤焼土器	坏				7	回転糸切			E-7III		墨書不明	
16	75	赤焼土器	壺	(250)			7		ロクロ	ロクロ	F-10III		
	76	赤焼土器	壺	(210)			7		ロクロ	ロクロ	北区II～III		
	77	赤焼土器	壺	(120)			5		ハケメ	ロクロ	F-12III		
	78	赤焼土器	壺	(134)			5		ロクロ	ロクロ	F-12III		
	79	赤焼土器	壺	(124)			4		ロクロ	ロクロ	G-10III		
	80	赤焼土器	壺				6		ロクロ・アテ	ロクロ・ナギ	北区II～III		
	81	赤焼土器	壺				5		ロクロ・アテ	ロクロ・ナギ	E-8III		内面燻
	82	赤焼土器	壺				8		ロクロ	ナギ・ナギ	E-7III		
	83	赤焼土器	壺	(370)			8		ロクロ	ロクロ・ナギ	北区III		
	84	赤焼土器	壺	(452)			8		ロクロ	ロクロ	E-7III		
	85	緑釉陶器	皿				5				D-9III		刷毛被り
	86	緑釉陶器	皿				5				E-8III		刷毛被り
	87	製塩土器					18		ナデ	ナデ	北区II～III		輪痕・草木状圧痕
	88	製塩土器			(240)		18		ナデ	ナデ	G-10III	R P 10	輪痕・草木状圧痕
	89	製塩土器	コンロ形	(100)			10		ナデ		E-8III		輪痕・被熱
90	製塩土器	コンロ形	(100)			15				E-7III	R P 2	輪痕・被熱	
17	91	珠洲系陶器	摺鉢				10		卸目	ロクロ	B-18III		
	92	珠洲系陶器	摺鉢				11		卸目	ロクロ	E-8III		口縁部に唇目状文
	93	珠洲系陶器	摺鉢				10		卸目	ロクロ	F-9III		口縁部に唇目状文
	94	珠洲系陶器	摺鉢				11		卸目	ロクロ	北区II～III		
	95	珠洲系陶器	摺鉢				12.5		卸目	ロクロ	X-0		
	96	珠洲系陶器	摺鉢				14		卸目	ロクロ	F-9III		
	97	珠洲系陶器	摺鉢	(140)			17	静止糸切	卸目	ロクロ	北区II～III		
	98	珠洲系陶器	摺鉢	132			13	静止糸切	卸目	ロクロ	S K 96 F 1	R P 9	S X II F 1, F-9IIIと推定
	99	珠洲系陶器	壺				11		アテ	タタキ	D-11III		
	100	青磁	皿				5				D-19III		
	101	青磁	碗				4				B-18III		被熱
	102	白磁	皿				3.5				E-16III		
	103	瀬戸	卸皿				7		卸目		G-10III		
	104	土製品	土鍋	長41	径15	輪5		重さ7.2g			E-7III		
	105	土製品	紡錘車	径42	厚12.5			重さ31.9g			X-0		
106	金属製品	煙管								B-16III		雁首	
107	金属製品	煙管								C-15III		喉口	
108	石製品	砥石	長46	幅22	厚18		重さ30.3g			E-8III			
109	石製品	砥石	長51	幅22	厚8		重さ11.3g			C-6III			
110	古銭			径24						D-17III		「寛永通宝」	
111	古銭			径22						南区II～III		「寛永通宝」	

V まとめ

木戸下遺跡は、庄内高瀬川沿いに点在する9世紀から10世紀を主体とした平安時代の遺跡群の一つとして認識されてきた。水路等に関する線の調査ではあったが、調査範囲が遺跡のほぼ全域に及んだ第1次発掘調査(佐藤庄一1995)においても、検出された遺構・遺物(赤焼土器他)は概ね9～10世紀に位置づけられている。しかし、今回の第2次調査では、それに加えて、中世に帰属すると考えられる遺構と遺物(珠洲系陶器他)の存在が確認された。

第2次調査は、木戸下遺跡域の東端部1,800㎡を調査区とした。庄内高瀬川左岸の自然堤防上にあたる地域である。その中でも、より川岸に近い東側の微高地に土壌群を中心とする遺構がまとも検出された。これらの遺構の中で、平安時代に帰属すると捉えられるのは、SK33土壌やSD46・47等の溝跡で、赤焼土器を主体とした出土状況を呈する。坏の形態をA～D類に分類を試みたが、いずれも北目長田遺跡C類(阿部明彦1995)の範疇である。従って、これらの遺構は概ね9世紀後半に位置づけられる。

中世に帰属すると考えられるのが、SD46溝跡を切るSK19・20土壌、SD47溝跡を切るSK27土壌等、A類の土壌群を中心とした遺構である。これらの土壌の多くは、本編で触れたように、土壌分析の結果からも土壌基であると考えられる。平安期の遺構を切っていることから、それより時代が下ることは間違いないが、遺物がほとんど出土せず、それぞれの土壌の時期を確定することは困難である。ただ、これらの土壌と同時期と考えられるC類の土壌や性格不明遺構から中世の遺物が出土していることから、大まかな位置づけは可能である。珠洲系陶器については、吉岡康暢(1994)によれば甕の口縁形式はb₁₂とc₄の2種、摺鉢ではb₁となり、どちらもⅣ₂期(法住寺第3号窯)に相当する。摺鉢の卸目技法についても、原体の単位や条数、施入法等からⅣ期と考えてよさそうである。瀬戸の卸皿については、法量や注口部・口縁部形態等から藤澤良祐編年(1996)の中Ⅱ期に比定できる。従って、これらの遺構には14世紀前葉の年代が与えられるだろう。SK18土壌出土の北宋銭「天聖元寶」の初鋳(1023年)とも矛盾しない。

ところで、中世の土壌基の発掘例は、庄内地方で10数カ所ある(山口博之1994)。中世村落においては村持ちの墓域が作られるようになり、その場所は村はずれ北西方向が好まれた(石井浩幸1996)とされる。本調査区は、13～14世紀まで遡るとされる北目館跡からの北西方500m、大橋遺跡(伊藤邦弘1988・1989)からは約4kmに位置している。現富岡集落の北西端にもあたり、近年まで火葬場があった場所とされる。こうしたことを考えると、この地域は古くから埋葬地などの非日常的な空間として機能していた可能性が高いといえよう。

参考文献

- 伊藤邦弘 「大橋遺跡第1次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第121号 1988
 伊藤邦弘 「大橋遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第139号 1989
 阿部明彦 「升川遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第9集 1994
 阿部・佐藤 「上高田・木戸下遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第25集 1995
 阿部明彦 「北目長田・橋持・堂田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 1995
 石井浩幸 「土崎・梵天塚・中谷地遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第42集 1996
 吉岡康暢 「中世須恵器の研究」吉川弘文館 1994
 藤澤良祐 「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界」資料集 1996
 山口博之 「山形県庄内地方の中世墓域について」山形県地域史研究20 1994

報告書抄録

ふりがな	きどしたいせきだい2じはっくつちようさほうこくしょ							
書名	木戸下遺跡第2次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第45集							
編集者名	佐藤善春・國井修							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
木戸下	山形県 飽海郡 遊佐町 大字富岡 字木戸下	6461	2083	39度 2分 8秒	139度 54分 12秒	19960508 } 19960621	1,800	一般国道345 号線道路改 築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
木戸下	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡 1 杭列 1 土壇 16	須恵器(坏・甕等) 赤焼土器(坏・甕等) 黒色土器(坏) 製塩土器			20箱	庄内高瀬川の自然堤防 上に立地。墓塚と思わ れる土壇を検出。
		中世	土壇 13	珠洲系陶器(甕・撥鉢) 瀬戸(卸皿) 石製品(石臼等) 木製品(漆塗り皿) 古銭(天聖元宝・寛永通宝)				

圖 版



木戸下遺跡遠景（西から）



北区全景（東から）



鉄入れ式 (北西から)



重機粗掘 (西から)



グリッド設定 (東から)



面整理 (南東から)



遺構線引き (北から)



遺構配置図作成 (南から)



遺構精査 (南から)



調査説明会 (西から)



S B 2 掘立柱建物跡 (北から)



S A 1 杭列 (東から)



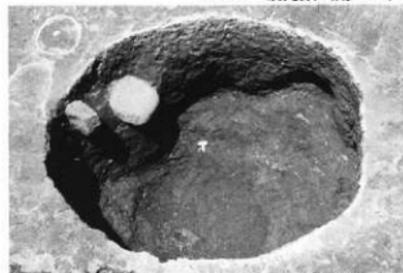
S D87溝跡遺物出土状況 (東から)



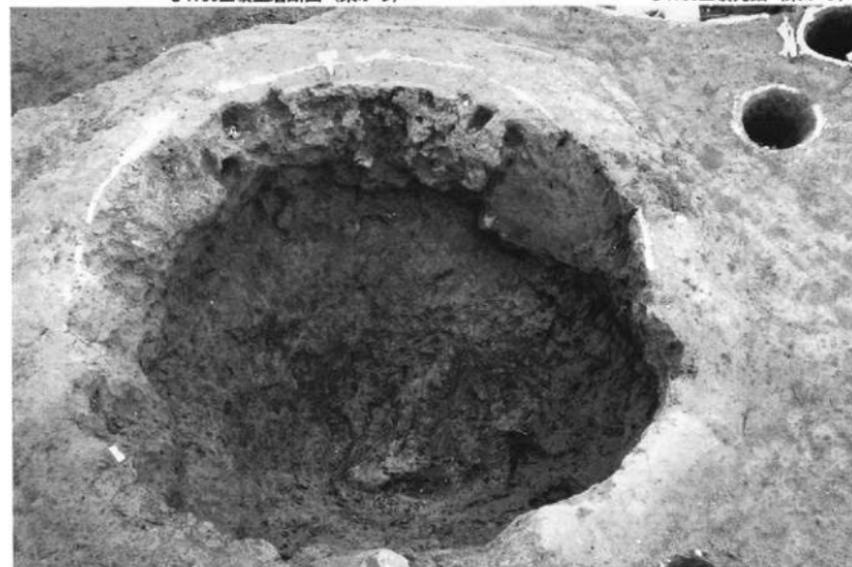
S K31土坑完掘 (南から)



S K30土坑土層断面 (東から)



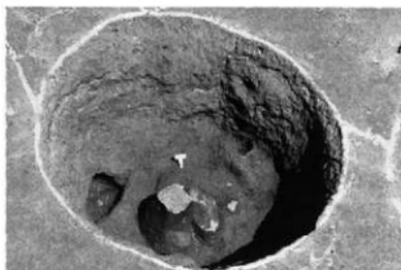
S K30土坑完掘 (東から)



S K16土坑完掘 (北から)



S K 19土壌土層断面 (北から)



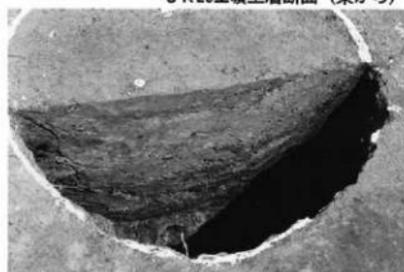
S K 19土壌完掘 (北から)



S K 20土壌土層断面 (東から)



S K 20土壌完掘 (南から)



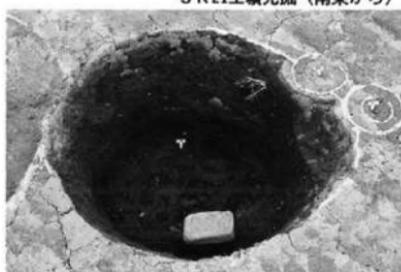
S K 21土壌土層断面 (東から)



S K 21土壌完掘 (南東から)



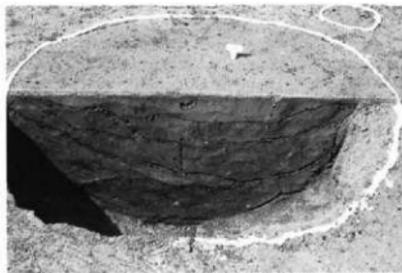
S K 24土壌土層断面 (北から)



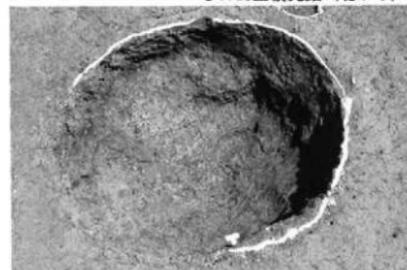
S K 24土壌完掘 (北から)



S K 15土坑完掘 (北から)



S K 27土坑土層断面 (南から)



S K 28土坑土層断面 (南から)



S K 33土坑完掘 (南から)



S X 11性格不明遺構遺物出土状況 (南東から)



R P 13出土状況 (北から)



R P 15出土状況 (南から)



R P 6 出土状況 (南から)



R P 10出土状況 (西から)



R P 28出土状況 (北西から)



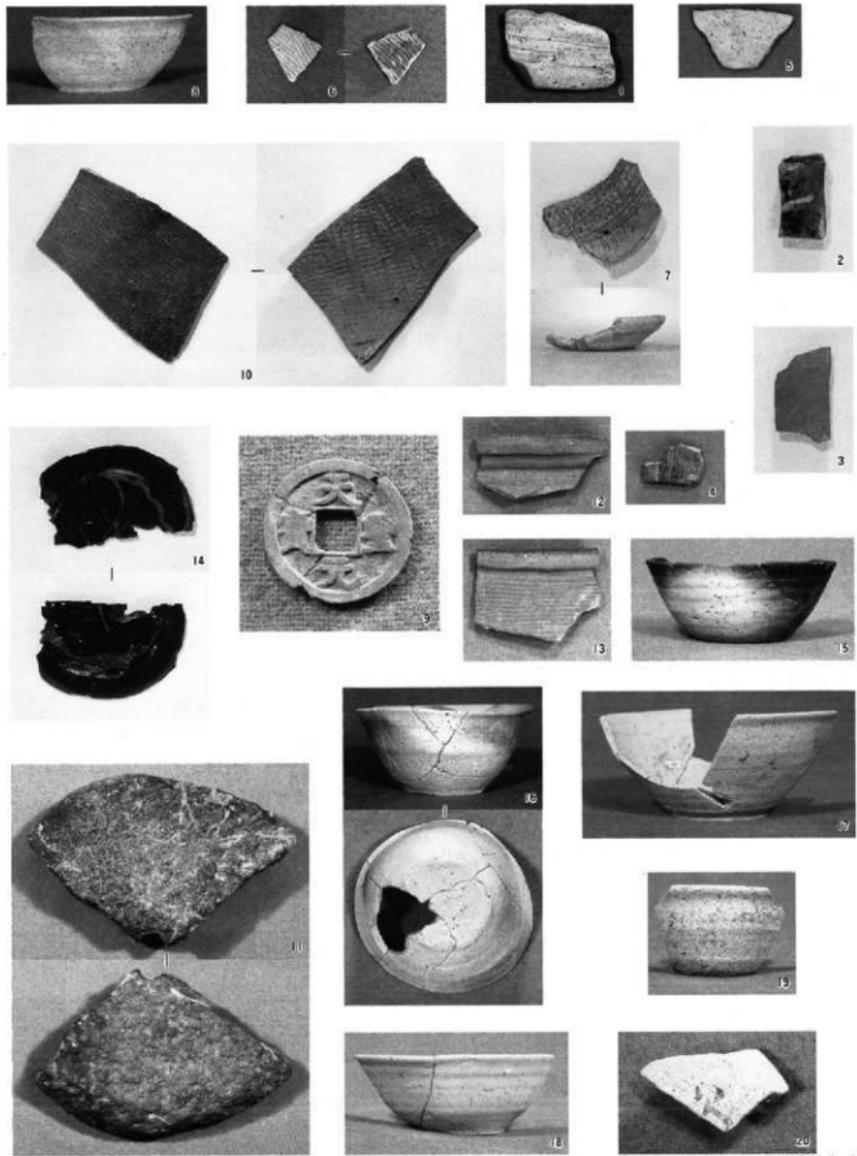
R P 2 出土状況 (北から)

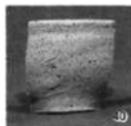
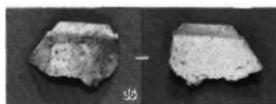
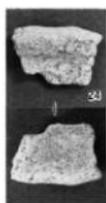
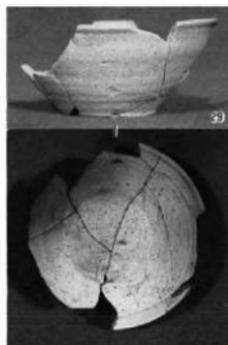
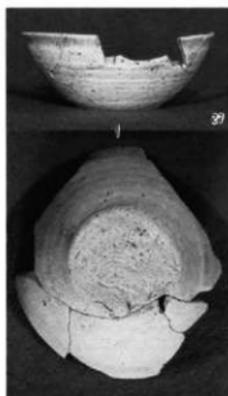
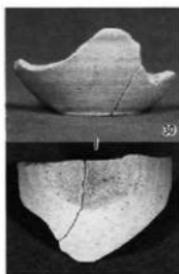
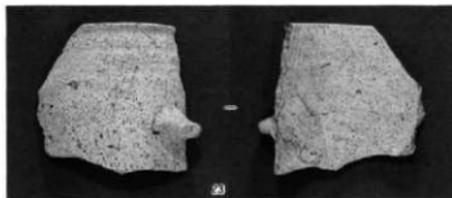
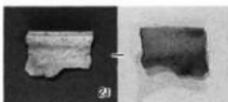


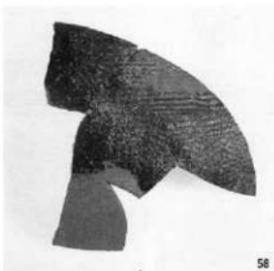
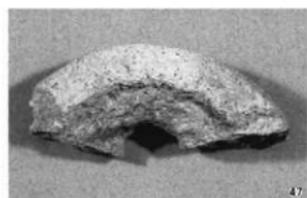
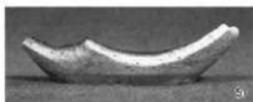
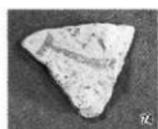
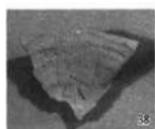
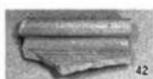
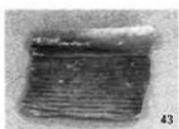
R Q 7 出土状況 (北から)

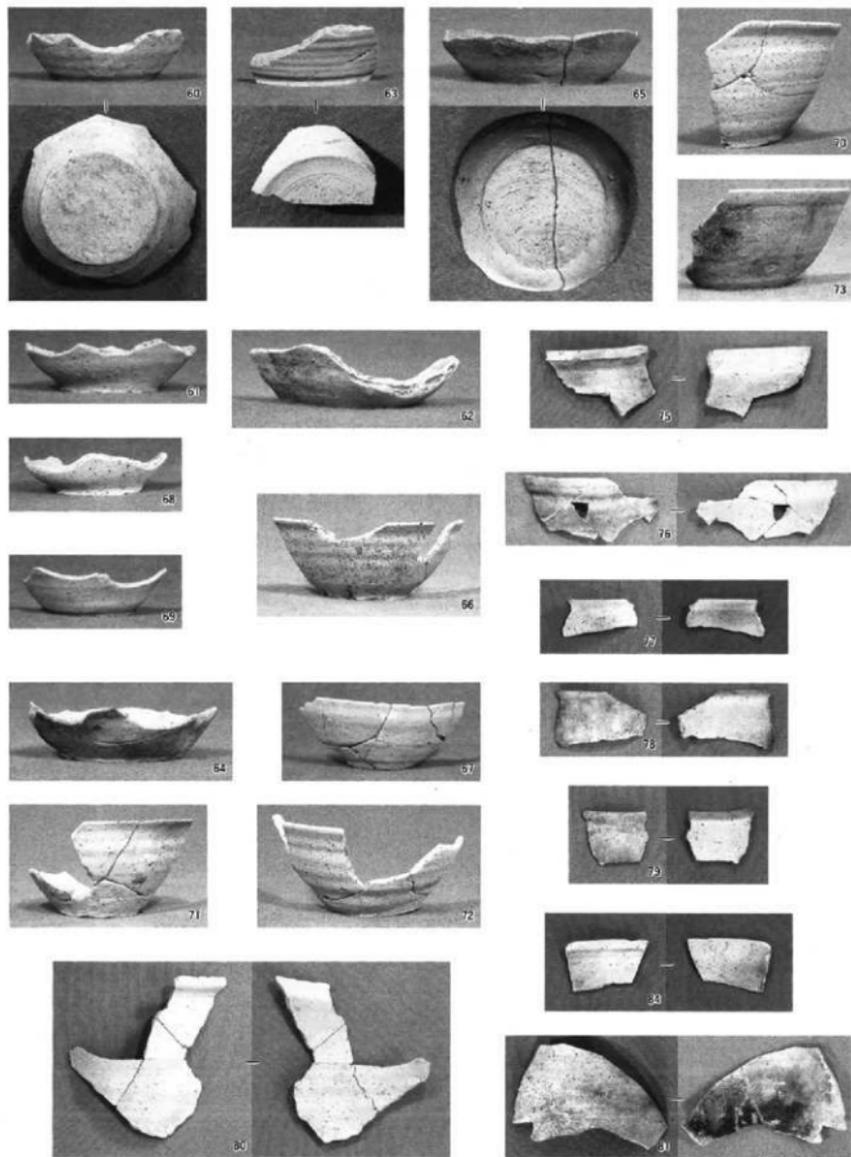


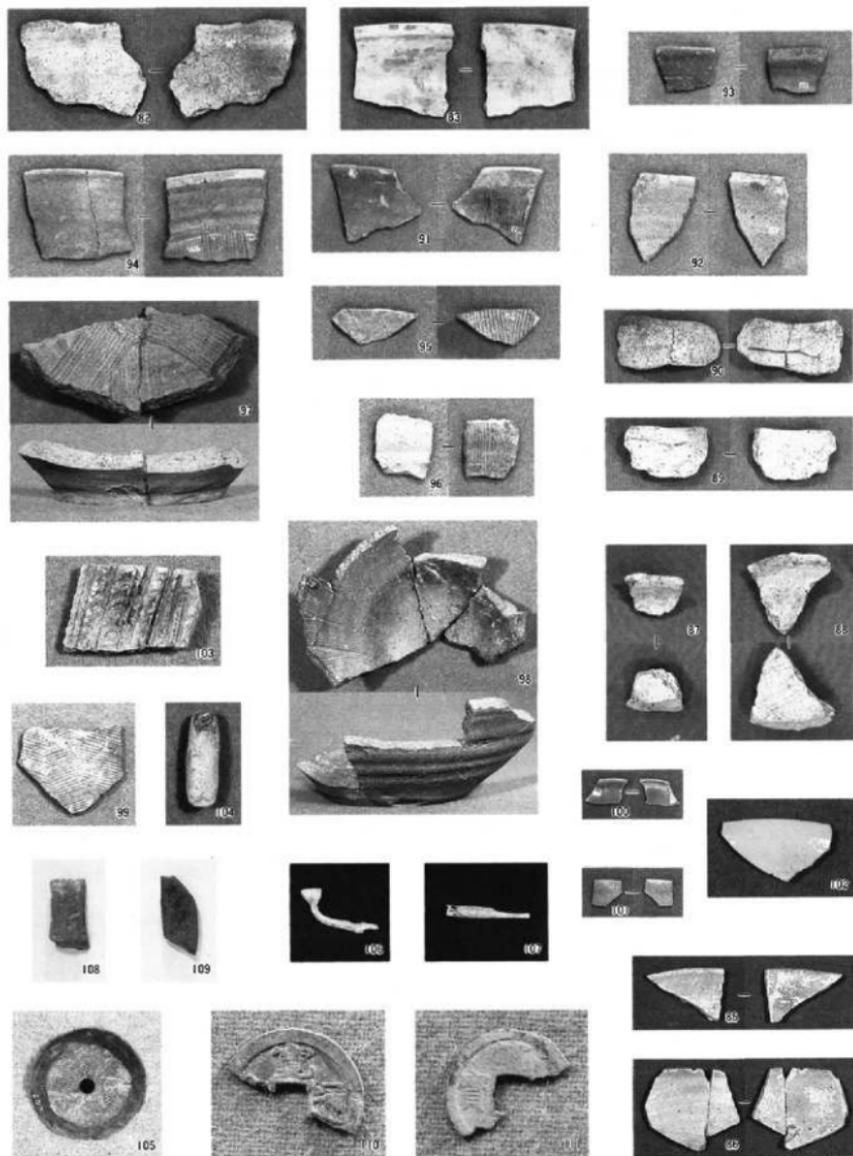
R W 25出土状況 (東から)











山形県埋蔵文化財センター調査報告書第45集

木戸下^{キドノ}遺跡第2次発掘調査報告書

1997年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 大場印刷株式会社
